

明治四十一年十月十五日發行

柁城

第
六
號

大隅加治木同鄉會

柁城雜誌第六號目次

口 繪

●錦水公の書並びに墓
●加治木區裁判所

論 說 一

●發刊一週年を迎ふ
●加治木繁榮策の謬見を批駁す
●會員諸君に敬す

柳 州 逸 八軒史

●大島名瀬便り
●韓國便り
●米國便り

霜 山 亭 生 助 水

●看護思想普及の必要
●粘佐村松原蘆葉の沿革
●疾病に就て患家の注意
●孤案獨語 (其二)

宮 内 盛 直 三

●旅日記

田 方 露 香 三〇

●漢詩○和歌○俳句○新派和歌

漫 言 三三

●社會主義と自然主義

島 津 墨 庵 三四

●學事一班 (其五) 龍門尋常小學校の状況 ●柁城男子小
●學校同窓會員現狀調 ●錦水公宜白年祭 ●島津家の雅宴

◎ 廣 告 五二
◎ 會 告 五三

●紙園祭 ●黒木檢閱使の通過 ●都文館紀念會 ●加治木
區裁判所移廳式 ●太鼓踊 ●山林會 ●山田造士館教授の
講演 ●本縣事務官の交迭 ●兵事會銀盃下賜 ●柁城男子
小學校同窓懇親會 ●同盟教育會の總會 ●女子小學校同
窓生會 ●愛國婦人會の慰問 ●平松神社例祭 ●青雲會の
送別會 ●村吏員の新任 ●始良師夏期講習會 ●長谷場氏
送別會 ●政友會九州代議士會 ●弓削事務官の學事視察
●模範煙草作 ●在郷軍人會 ●中學校運動場の地均 ●稀
有の大豐作 ●霧島山麓の特別會員 ●濱島彦助氏の厚意
●流行病 ●美事一東 ●各學校入學者

讀者の聲 四九

◎ 教 件 會 報 五〇

●會員の動靜

●本會の基本金寄附者氏名錄 (第六回申込順)

●雜誌代領收

●收入支出精算報告並に特別會計報告

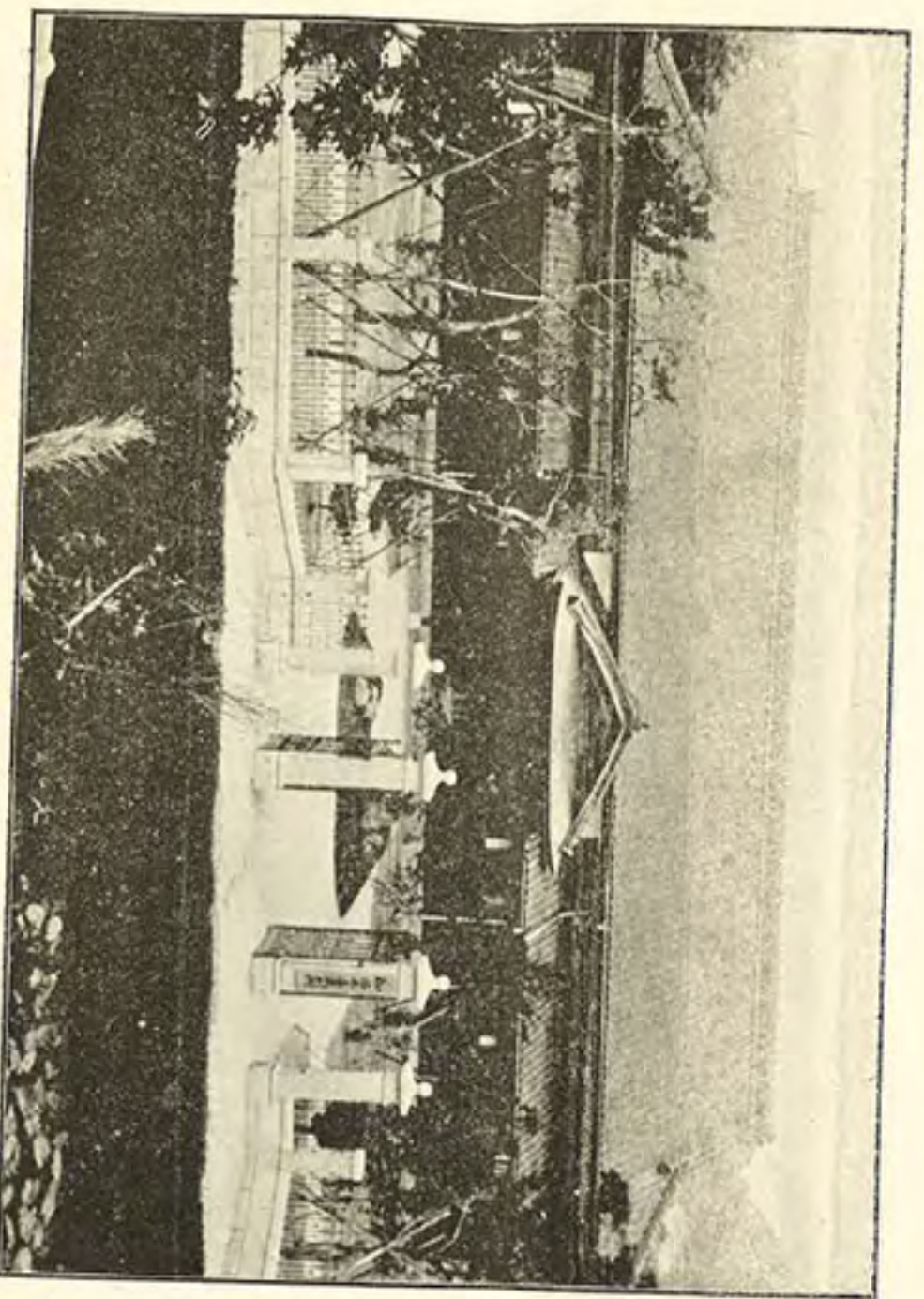
●在外雜誌講讀者住所氏名 (申込順其五)

●本會規則摘要

柁城雜誌第六號目次
馬田悠々心都田地平如掌
馬田悠々心都田地平如掌



墓ニ並書ノ公水錦



加治木區裁判所

柁城雜誌第六號

論說

發刊一週年を迎ふ

雜誌「柁城」が我が加治木同郷人の親和を計り、幸福を増進するの主旨を以て、讀者諸君と相見へしより、正に一週年と一ヶ月の日子を經過したり。

初號發刊以來本誌が常に社會進歩の趨勢に伴ひ、一村文化の開發と和協とに努めて怠らず、號を重ねるに従ひ、着々態を整へ實を豊かにし、其主張と相乗ることなく、今日に至れる所以のもの、内に編輯員の努力儘まるの熱誠ありとするも、尙ほ外に會員諸君が甚深なる愛顧の致す處に依らずんばあらず。

夫れ一事業の企劃せらるゝや、必ず周到なる準備と卓越なる手腕とを要す、準備とは何や、一に實力是也、手腕とは何や、事に當り變に處し縱横制策して謬をなさ機略經綸の才と識と也、この二者駿馬と御者との如し、二者其術を得ざれば千里一瞬なる能はず、文明の世に在て事業を劃す、多く前者を要とす、雜誌經營の業に於て特に然り、外に讀者を釣るなく、毫釐も利慾の念なき、「柁城」の如き意味の雜誌に在りては殊に然りとす。

吾人が創めて本誌の發刊を企劃するや、心竊に憂ひとしたるもの實に實力の一點に在りき、奈う知らん、創業半歳ならずして基本金の集まるもの數百、先きの憂としたるもの全く一片の杞憂に過ぎざりしことを、諸君の眷顧かくの如く厚くして而して深し、願みて本誌が過去一年間の事業を見るに、所期と違ふこと遠く、諸君の愛顧に沿はざることを甚し、豈忤怍たらざるを得んや。

然りと雖「枕城」は僅に呱呱の聲を揚げたる襁褓児のみ、前途は遠遠也、内容外形共に未だ準備の中にありといふて可なるのみ、基本金の如き「枕城」をして堅固なる地盤の上に立たしむるに於て猶ほ遠し、記せよ「枕城」は諸君とわれ等との「枕城」也、本誌が所期の發達を遂げ、素志を貫徹し得るも、萎靡惛惛起つ能はざるに至るも、責の歸する處は只諸君とわれ等との外にあるべからず、今や世界の文明は日に進みて息まず、帝國の事業日に多端を加ふ、本誌の責任亦實に重大なるなるを感ず。

わゝ活見達識、夙に文明の真相を洞察し、高遠の理想と確乎たる信念と、不退轉の勇氣と、堅實なる態度とを、持し、以て一郷の自治團體をして圓滿なる理想郷たらしめんとす、本誌の前途や實に遠し、庶幾くは内外の會員諸君、諸君が温なる擁護の手に依りて本誌が益々健全なる發達を遂げ、永遠に美果を納むべく長き論らざる愛顧を乞はれ、さらば本誌の前途や、漾々として春海の如くなるべきを疑はざる也。

加治木繁榮策者の謬見を批駁す

柳州逸史

北隅一帯の貨物集散地として陽州第一の都會たるの名實を有せし吾加治木町が鹿兒島鐵道開通後俄然寂寥たるの光景を現し、管官廳及び中學校所在地たると舊來の附力とに由り僅に街區の面影を保持するのみにして若し一朝之れ等の要件を拉し去らるゝの曉には純然たる農村の田舎町以外都會として存在すべき何等資格なきに至らんとする境遇に陥りしより爾來七八年加治木繁榮策は吾郷の宿題となれり加治木繁榮策之を廣義に解すれば其の目的は加治木全縣の經濟的發展にして其の方法は農工商乃至漁業牧畜等あらゆる方面の進歩を企圖せしむるの性質を有するものならざるべからず然れども所謂加治木繁榮策なるものは加治木町を以て依然商業的都會の面目を維持せしめて商況の殷盛を期するの目的に出づるものにして寧ろ加治木町挽回策なるが如し而して此の種の繁榮策に對し愛郷の士其の解決に腐心して諸種の方策を考案し進みては之れが施設を實際に試みて已まざるは只に歴史的回顧的感情に基く運動として之れを冷視すべからざると同時に住民全体の自衛上當然の

措置として其の勢を多とせざるべからず何者町部の繁榮は獨り商業關係者の幸福なるのみならず他の生産者及び消費者を利し又村の財政に資して吾郷全般の福祉を膺すの一大原因となれば也。

重商的加治木繁榮策は即ち全加治木繁榮策なる斯の如く又縱令一局部民の利害に關するものなりとするも其の幸福の増進を目的となすに於ては吾人は這般の運動に對して好んで論議を狹むの愚を試みずと雖も從來の提唱施設其前提を謬りて斷案の正鵠を失し到底策者の期待せるが如き効果を收め得ざるのみならず却りて意外の惡現象を惹起するの因をなすものにあらざる乎吾人感なき能はざるなり果して然らば何を以てか策者の斷案は其の前提に於て謬れりや策者の加治木觀が其の根本に於て誤謬を有すればなり即ち彼等が現今の衰微は人爲的手段に待て必らず之れを挽回するに難からずとなし加治木をして徹頭徹尾商業的發展をなさしめんと努力するは加治木を觀察して天然の商業地なりと思惟するの結果にあらずや加治木が果して彼等が思惟するが如く商業地たるの資格を有する乎少しく此種の眼光を有するものは富に之れを言下に否定すべし今彼等が此謬見を抱ける所以のものを見るに加治木の地形が海陸の便宜を有するが爲めなり故に或は加治木は海陸の連絡を計るに由りて往日の盛觀に復し得べしとなすも雖も近く鹿兒島を扣へたる加治木は若し鹿兒島以上の設備を施さば兎も角之れと同等の設備をなせしと假定するも地の利に於て一籌を輸し決して相對峙するの資格を有せず如何となれば本縣の貨物集散地として試みに此の市町を中心とし各其勢力範圍の分布を爲さば薩摩及び南隅は依然市の支配を受け加治木の勢力は僅に北隅の一局部に及ぶに過ぎざるのみならず市は海路の國門に當りて對外的有利の地位に在れば加治木を中心とせる勢圖は却りて漸次市の勢圖内に包含せらるべきを以てなり或は肥薩鐵道全通後は如上の勢圖を縣外に及ぼし得べく從て加治木は此の方面に於て有望なりとなすものあらんも之れ北九州の經濟的勢力を度外に措きし皮相の見にして之れが爲め疑なく本縣の經濟狀態に變革を來すに反し吾町が現狀以上其勢力範圍の擴張を望むは恐らく望望の議を免れざるべし由是觀之加治木が海陸連絡に關し多少の設備をなすも到底市の壓迫を避くるを得ず其の商業的存立は遂に不可能に歸せん斯の如き狀態に關せず往々人の肥薩鐵道の全通に對し一縷の望を囑し旅客及び貨物の幾分を吸收し得べしと想ふが如きは思はざるの甚だしきもの

なり貨物は勿論觀望の閑人にあらずんば經濟的目的を有する者何人か足を加治木に停めんや其の絶無なるべきは三尺の童子も亦斷言するに踴躍せざる處なるべし、實に今や加治木は商業的方面に於て海陸共に其の關門を閉塞せられ極めて狭少の經濟的區域の之に隸屬する外地地理上當然從屬的關係を有する附近地方も亦餘を逆にして反抗し來り恰も孤城落日の感なくんばあらず而も其の閉塞の永久的なる上述の如きに於ては商業的都會としての價值夫れ幾何ぞ之れ吾人が商業地として加治木を見るの誤謬にして商業的發展を企圖するの運動が畢竟徒勞に屬すべきを主張せんと欲する所以なり。

想ふに加治木が商業地として現出せし起原や古し其の地形を考へて之を人文發達の跡に照せば蓋し加治木町は單に政治的都會として封建時代以後の建設地にあらず遠く其淵源を上古に發し縣下に於ける最古集市の一なるや明かなり今姑く斯の如き好古的想像は之を措き中世加治木城主たりし大藏氏が秦姓たるは或は支那の貿易者此地に來りて定住せしもの裔にあらずるなきやを疑はざるを得ず（尤も雄略帝時代秦姓の者勅命に由りて現下の始良郡地方に來住し蠶桑の産業に従事せし史蹟は明かなりと雖も）實に支那及び西洋貿易の嘗て加治木に於て行はれし口碑と相參照して史的妙味の津津たるを覺へずんばあらず而して又足利時代本邦古錢の一種加治木錢なる貨幣が加治木地方に流通せし事實も亦明かに加治木が當時商業地として顯著の發達を爲せるを証するものにして夫の怪雄豐公の加治木割取の真相を剔抉せば彼の銅眼に映せし加治木が恐らく對外的商業地として嚮望すべきに由りしものにあらずる乎當時加治木の殷盛なる彼が文祿年間命を石田三成に下し三州の租法を釐革せしめし時其策源地となり加治木町湯淺讃岐守の邸宅に事務所を設置し多數の關係者鳩集して計量の事に從ひしを以ても亦之れを想像するに足れり若し夫れ大阪城の落武者身を商賈に貶して加治木町に來住せしもの多かりしを思へば蓋し思ひ半に過ぐべし此事勿論政治的意味を含まんも誰か天下の商業地大阪に住せし彼等が商業的發展を看過して單に政治的事由に支配せられしものなりと斷言し得んや義弘公館を加治木に遷せしより加治木の發展は政治的哺育に待ちしも掛からざるべしと雖も加治木は元來斯の如く自然的商業地なり然も之れ現在の加治木にあらず勿論將來の加治木にもあらず過去の加治木が斯の如き名實を有せるのみにして要するに

歷史上の商業地ならんばあらず吾人今や歴史を顧みて俄々の感なき能はずと雖も時勢は人力の以て如何とも爲すべからざるものあり桑田變りて碧海となる轉變の法則に支配せらるべき現實界に於て商家櫛比の地農村と化するも亦已むべからざるにあらずや。

世間往々時運の推移變轉の世相を觀せざるの徒あり吾郷黨亦時に此理を悟せず現今の加治木を見るに尙過去の加治木を以てし、加治木は何処迄も商業的發展の運命を有するが如き妄想に驅られ惑迷の極珍妙の方策を案出するもの掛からず夫の年市及月次市のものゝ開催に由りて顧客の吸收を企てしは珍案の一にして其失敗に歸せしが如きは當然の數なるが近來又同種の觀念に基き少しく其方法を異にせしハイカラ議論遊覽客吸收策なるもの主唱せられ頗る郷人の歡迎を受けるを見るも要するに亦商業的加治木に憧憬せし結果にして其血迷ひさ加減を推知すべきにあらずや、即ち加治木が風光に富むが故に之を利用せんと欲するものにして龍門庵の成功其動機をなし關郷の舊跡勝區に相當の設備を施して遊覽の人を招致せば其消費に由りて却りて往自の繁榮を凌駕すべしとなし既に其經營に一步を進めんとするの傾向を生ぜしものゝ如し吾人は此種の計畫に對し經濟方面以外に於て識者の一考を煩はさんと欲するもの也勿論斯の如きの經營は經濟的に多少成功すべきは疑なしと雖も遊覽客の財囊を目的とするは既に其性質に於て乞食的たるを免れず一郷の風氣をして悉く乞食的ならしむれば其結果は如何殊に遊覽の地往々不健全なる分子の伴ひ易く般服に趨くに從ひ益々其度を増加するに至るは例証する迄もなし斯くては社會的に墮落を招くの基にして折角の名案が若し剛健進取の美風を破壊し去らば其影響する處の廣汎なる寒心に堪ゆべけん此時に際し臍を噛むも又遅し夫れ進取の人類は主動的ならざるものなく遊覽地の住民多くは受動的也從て其性格は優柔にして亡國的たるを免れず見よ世界に於ける遊覽地たる羅興民族の諸國は僅に佛國の少しく生氣を帯ぶるのみにして而も佛自身他の強國に比して威風甚だ索莫たるの觀あるにあらずや、吾京都の萎靡不振徒に京美人の風韻の花と其麗麗を競ふ所以のもの亦京都が本邦の遊覽地なれば也、事物の半面を見て全相を知らざる擔板漢流之に察して益々惕然として戒懼し豁然として其過誤を悟了せざる要するに遊覽客吸收策の如きは進取的民族の採るべき政策にあらずして社會的見地より率之を排斥すべきものなれ

ば則ち吾郷の秀山名水は宜しく之を吾人の豪懷を造るの境に委して可也況んや加治木の風光が遠來の客を招致するに足るべき絶勝の地となすは聊かお國自慢の根性に過ぎざるに加へ他方面より之を見るも遊覽客吸收策は加治木の繁榮若しくは商勢恢復に對し爾く多大の効果を與ふるの價值を有するものにあらざるに於てをや、但し其個人的經營に對しては勿論容喙の權利なく一郷の裝飾及僭樂の目的を有するものに關しては異議ある筈なし須らく混同せざるべきを望む。

吾人の所謂加治木繁榮策に對する管見斯の如し要之加治木の繁榮に關し重商思想を固執することの極めて不可なるを指摘せし迄也吾人は鐵道布設の日既に已に引導を受けし商的加治木に對し果てしもなく戀々として姑息の蘇生手段を弄するは相率て益々深淵に沈まんとするの愚策なるを信し吾郷人が男らしく語むべきを諦め緊揮一番猛然として他に發展の活路を開拓せん事を切望す元より工本的繁榮論の如き此の活路に對し一條の光明を與ふるものなりと雖も未だ漫然たる主唱に過ぎずして傾聴の價值を認むるに足らず吾人は愛郷の士の更に深甚の研鑽あるべきを樂み加治木繁榮策は吾人の之れに對する説と共に尙郷黨の宿題に貽さん哉（九月廿日稿）

會員諸君に檄す

棕 軒

回顧すれば杞城が賑々の聲を擧げしより、歳を閉する事方に一年、號を重ねる事五、爾來着實誠懇を主とし、會の盛運を任とし駁々として日進月歩の勢あり、宜なる哉杞城の名譽噴々として巷間に喧しきや、然りと雖るの期する處遠大に、るの任する處重宏なる發行の素志、何う是に於て足れりとする者ならんや。

夫れ天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かず、此和以て萬里の堅城を振ぐべく、此和以て社會の狂瀾に抗するを得べし、緩急相助くるの友誼、先進後輩相親しむの温情亦是れ團結の美風なり、惟ふに同郷會は此美風を發揚せんが爲めに生れたるに非ずや、反目せる相互の意志を疏通し、以て紛雜なる社會の活舞台に相提携し、國家の勃興本村の進運に裨益せんが爲めに、非常なる熱誠と非常なる抱負とを以て、卒然頭を擡げたるに非ずや、義勇なる諸士は豁然として來り贊し、高俠なる先輩諸賢は皆悦んで贊助の勞を諾せらる、我が愛す

べき本會は今や方に一千の會員を有し、五百の誌友を得るに至り、諸多の規制畧ぼ定まり秩序稍や整ひ、之れが機關たる杞城は遂に諸君の眼前に飄かれたるに非ずや、春秋二季の總會は毎回開かれたるに非ずや、諸君の抱負は得て述べべく、諸君の卓説は得て陳すべく、諸君の詞藻は得て謳ふべし、而かも諸君は何を憚つてか其富饒にして高潔なる詞藻を讓はざる、公明にして雄壯なる議論によりて何が故に諸君は其雄辯を揮はざる、偉大なる諸君の抱負と鬱勃たる諸君の不平は本誌悦んで之を載せん、而かも在郷誌友今や黙して語らず在外誌友亦氣燄の旺盛なる者を見ず、嗚呼吾が同郷會落莫として蕭條たる何う夫れ此の如く甚しきや。

蓋し同郷會の不振は一面に於て、慥かに本村元氣の銷沈を意味す、會員の無熱誠是れ豈本會の衰頹を豫言しつゝあるに非ずや、而して此の如き會を有せる本村は、何に由てか其美風を發揚し、何に憑りてか天下に活動せんとするや、諸治制は如何に燦然として整備せりと雖、諸聯合は如何に巍然として天を壓すと雖、未だ以て盛なり榮なりと云ふこと能はず、物質的皮相的美觀誰れか頼かに其真髓を隱匿するを得ん、必ずや元氣の鬱勃たるを要す、必ずや和樂團結以て一村の盛運を希圖するの美風を要す、嗚呼此元氣を養ひ、此美風を作爲すべき我親愛なる同郷會は今や實に昏睡の中にあり、千鈞の鐵鎚以て速かに此昏睡を破り、輝々たる熱誠以て之を挽回するは、是れ豈諸君と共に努力すべき目下の急務に非ずや、吾人は羊頭を掲げて狗肉を賣るを惡む、同郷會にして名實相伴はざること長く此の如くんば、寧ろ根本的に之を破壊し終るの優れるに如かんや、大厦の將に倒れんとする一木の能く支ふる所に非ず、漫りに秃筆を呵し敢て諸君に檄す、



通信

大島名瀬便り

霜亭生

大島の一角名瀬港より一筆啓上仕り候各位益々御隆昌御多祥の密大慶至極に存ト奉り候陳者小生儀之れ迄株式會社浪速銀行鹿兒島支店に勤務致し居候処今同當地支店へ轉勤被命去る六月下旬赴任候に付ては難と當方の見聞録左に御報可申上候尤も若後日尙ほ淺く万事皮相の見たるは免かれざる儀に有之るは各位豫め御承知置被下度候當名瀬港は御案内の如く鹿兒島沖繩間の中位に在り船舶の出入間斷なく隨て貨物の集散等相應に有之市街も可なり賑盛を呈し居候されば惜しい事には港内水淺く且つ北向きの入江とて風波の害を免かれず軍艦などは吃水淺き大和艦等の如きを除きては全然入港覺束なく自然の良港海人工を加へざる爲は此の價値なきは残念に候先年の火災後市街は割合に立派と相成大家高樓櫺櫺の有様に御座候數年前迄は町民の生活至て吞氣の休にて夜は八九時に店を閉ち朝は九時頃ならでは起き出でざりし由に候も今は各店を通ト十二

時過迄店を張り朝五時頃には店頭塵打つ音を聞く位に勉強致し居候商店は大抵デパートメントストア式にて専門の商賣としては僅かに書店小間物屋二三に過ぎず候官署には先づ島廳あり新築の二階建てに名瀬村山手の高地に位し我銀行社宅と相對し眺望最も宜敷候稅務署長の染川氏は嘗て加治木の同署に長たりし人今尙は各位の御記憶に残り居候半同署に万膳重雄氏あり織物消費稅徵收の爲め目下笠利村に出張中に有之候消費稅といへば思ひ出し候砂糖消費稅は砂糖一斤に對し三錢とは随分振つた高率のものに候本年の當郡砂糖產出高總計拾參萬五千樽假りに一樽一百斤入として概算候へば實に其消費稅のみにても四拾萬五千圓と可相成候織物消費稅は細一反普通六十錢より八十錢の間に有之候假りに一〇年の製出高三萬二千反とすれば此稅貳萬貳參千圓と可相成人間は全然稅を收めんが爲めに生きてる様の感有之候誰しも大島の事を思へば先づハブを連想すべく候年々ハブ狩を執行致しつゝ有之候由に候へども中々減ト不申何時先生の襲來に逢ふことか片時も油斷相成不申候ハブにも種々有之普通色合にて金ハブ銀ハブと區別し居り金ハブの方害毒激烈のことにて之れ有り候徳の島産のハブは大島の比し害毒至て輕微

の由に候當地には幸ひハブ血精藥院有之東京傳染病研究所長北里博士の下に屬し醫士山本某出張専らハブ毒

も柄合等御好に應ト御用立可申候敬具。

霜亭生とは曾て鹿兒島新聞記者として僱傭の筆を揮ひたる原田經則君の雅號也(記者自)

韓國便り

在元山警察署 老山戸之助

研究中に候同藥院には常に研究材料としてハブ五六百位宛は飼育致され居り誤つてハブに打たれ候も右血精注射療法にて大抵平癒する由に候我々も幾分安心致し居候様の次第に御座候其他區裁判所警察署監獄署小林區署測候所糖業模範場縣立病院等あり學校は小學校の外に大島農學校あり竹林氏其長として熱心子弟の教養に勉め居られ候土地は大方活版致し居候にも不拘殆んを肥料は用ゐざる様思はれ候尾籠ながら人糞などは大抵海中に投ト居候向も有之候隣摩幸も年二三回收穫有之由に候も十質糞しき上に肥料を施さざる故極小なるもの一莖に漸つて一つか二つ位ふら下り居候味も亦美ならず内地人の需用には大抵鹿兒島より下し居り候野菜は全然無之牛猪肉は時折店頭に見る位に候魚肉は味至て拙なく小生などは寧ろ喰はざるに如かずと駄々をこね居候唯一の好物あり芭蕉の實にて候されど之れも一個二錢を超過候ては中々口に入り不申只今芭蕉栽培に熱中致し居り候好景結實候は編輯員各位の勞を慰すべく辛便にて御送附可申上存念に御座候尙ほ袖等御入用の御方は御遠慮なく御下命下され候は何時にて

拜啓各位御清瀆奉賀候雜誌城正に落手仕り深く御禮申上候第三號より第五號迄は永藤分署在勤中頂戴仕り當時直様御禮狀差上る考へに有之候処御承知の通り昨年七月京城驛より各地方に彼の暴徒蜂起したるに付ては守備隊と共に時々討伐に出張勝ち加ふるに小生は本年一月より會計事務を取扱ひ居り候爲め非常に多忙にて實に寸暇を得ず遂に思ひながら時を経過し今日迄御無音に打過ぎ甚だ失禮致し不行届の段は何とも申譯なき次第に候。

雜誌城が如何に目下の小生を慰めしかは別に申述る必要も無御座候亦在郷先張諸氏の如何に城の發達に御盡力なさるか又多年音信不通なりし舊友諸君並に先輩諸氏の御近狀も相分り何となく懐かしき感ト致候同郷諸氏も目下大分世界の各地に翅を伸し各々其地に事業を經營し居らるゝは何よりも慶事に御座候爰に遅馳

ながら我愛すべき郷里松城の此後益々繁榮せんことを祈り併せて此親むべき雜誌松城の健全なる發達と在郷在外諸氏の益々成功せられんことを祈候。小生も當地方の状況を委細諸君の机上に通信致度と考へは萬々有之候へ其未だ暴徒も全く鎮定に至らず種々多忙に候す。此度は之れにて御免を蒙り不日委細御通信可申上候。諸小生も七月十一日附にて元山警察署在勤を被命全月廿四日當地に到着致候。當地は日本人の戸數九百七十戸人口男女共都合四千六百餘の在留民ありるに守備隊の兵士六百餘の駐屯兵もあり海軍側にて時々葛城松江明石艦の入港あれば幾分か賑しく全く内地に於けるが如くに候。

此以前金六拾錢を送附すると共に普通會員に入會致し置き候へ其今回は茲に金五圓を更に御送附致し特別會員に加入致度候間宜敷御取計らひ可被下候勿々

米國便り

在米 湯田 碧水

△吾輩は郷を出て既に五年になるから在郷諸君の状況は委細知らないが時勢の進運に伴ふて益々向上進歩の域に向はるゝであらうと思ふ曩に吾輩が郷園を出づる

時は恰も日露戦役の最中で婦人諸君が軍隊の送迎に慰問に或は死者及遺族に對する同情の如き諸君の活動は中々盛であつた。平和克復後朝野を擧げて戦後の經營に汲々たるの今日婦人諸君の行動又當に見るべきものがあらうと遙に察して居る。

△吾輩は曾て米國婦人が朝夕新聞雜誌を愛讀して氣品を高め知徳の増進に努め常に修養を怠らないことに感上禱筆を呵して鹿兒島新聞に投稿し鹿城婦人諸君の猛省を促しておいたことがあるが今回は米人の公徳と家庭教育の一二につき所感を述べて在郷婦人諸君の注意を喚起したいと思ふ之は獨り婦人諸君のみではない男子にも勿論必要な問題ではあるが只だ婦人諸君は家庭教育の主人公と曰ふ立場から婦人諸君に對する一片の婆心であるから其賦りで見ても可い。

△吾輩は米人につき感した事は澤山あるが其の中で米人の公徳心の發達して居ることは特に目についた元來公徳心の發達して居る人民は常識が圓満に發達して居る人民である言を換へて曰ふと文明人は公徳心が發達して居る非文明人は公徳心が缺乏して居ると曰つてもよい。

△米國では各所に公園が設けてあるが此公園には四季

の草花や珍奇の樹木が植へてある日曜などには各階級の男女幼老が散歩に出掛けるものが多い所が一人として花を採り枝を折るものがない腰掛を汚し樂書などするものを見ない衆と共に公園の美を眺め共に楽しんで居る所は如何にも大國民の態度が見えてゐる然るに日本では公園や神社佛閣の境内には樹木を折るべからずなぞ制札高々に建ててある此制札を見ても如何に日本人が公徳心に缺乏してゐる非常識的の人間が多いと云ふことが歴々と讀まれてゐる公園や神社の境内にある草花樹木を採折することは悪いことであるとは知りながら屁とも思はない、米國などには如此制札の立てゝあるのを見たことがない夫れは米人の公徳心が發達してゐるから公園の花を採り枝を折るものがないからである。

△東京市尾崎行雄氏が話したことがあると比谷公園の水飲場に水呑を備へておくとは何時の間にか紛失する又備へると又盗みやがるところで止むを得ないから極く粗末の水呑を備へることにした苟も全國の模範市民たるべき東京市民に此の如く公徳心の缺乏してゐる人間が居ては困る東京市民は尤も泥棒同様だと獨り東京市民ばかりではない日本全國中には泥棒的人間が多

い吾輩は米國に来て米人が公徳心の發達してゐるのを見て大に感したと同時に我國國民の公徳心缺乏に省みて報然たるを得なかつた日本人の國家的觀念の旺盛なることは世界に其比を見ないが個人的道徳の幼稚なることは支那人にも劣りてゐる。

△夫れから日本の停車場では汽車に乗るときも降るときも非常に混雜して幼老婦人などは押し除け我先きにと争ふて爲めに巡査の手を煩はすことは常に見る所であるが米人の如きは分秒を惜む大多量の國民でも乗車又は下車のときなどは至て静かで他を押し除けて自分先きを争ふものはない夫れで停車場に巡査など見たことはない其他日本人が約束を無視し信用を重んじないことは世界中有名なものであらう在米の同胞が約束を守らないことは白人より非難攻撃の集点となりてゐる之れも公徳心缺乏の証である。

△ところで吾輩は在郷の婦人諸君殊に家庭の主婦たる人に希望する諸君は家庭に於ける子弟教育の大任を双肩に擔ふてゐる人達であるから諸君の子弟が成長の後眞正なる紳士となるに否とは諸君の責任に屬することであり子弟の教育には深き注意を拂うてもらいたい吾輩は思ふ家庭教育上最も有効なる法は父たり母たり若くは兄

たる人が日常の言動動作を慎み何事も實行の模範を子弟に示すことである。則ち子供に向つて一言も虚を吐かないこと天地の間物各々其主あり苟も我の有にあらざれば一毛とて取るべからずと云ふ觀念を持し筆柴一枚とて他人の所有に屬するものは斷して取るべからずと云ふことを朝夕子弟に訓誡すると共に必ず實行するのである。而して特に諸君の注意せらるるものは子守である。子供が啼くでもすると他家の花を折りてやる果物でも馬場廻りに靡かしてをると一つ二つ摘み取りてやる此の如き事が自然に子供に惡感化を與へ公園の草花を折り路傍の稻の穂を抜きなどする則ち公德心の缺乏泥棒根生は總べて皆茲に胚胎するのである。

△米人の家庭では子守は日本と同じく大概婦人であるが米人が子守を傭ふには教育の有無及言動動作が野卑ではないか品性は如何なきよく子守の人物性行を確かめから傭ひ入る子供の教育は全く主婦の全權であるから子守を信用すると大概な事は子守に任す、そこで子守の權力は中々強いと同時に責任が重いから自分の言語舉動を謹み主婦に代りて子供を教育してやる日本では子守の人物性行などには餘り注意しない様である。子守卑猥なる俗歌を歌ふたり時には神社などで子供はは

つてにおいて御自分は晝寝甚しきは醜行を演じてをると云ふ事は往々見聞したことである。三ツ子の魂百までと云ふことがあるが此の如き子守に育てられた子供の成長後の品性は如何であらうか思へば實に頭上冷水を戴いてをる様な感がある。子供の教育には深く注意せられんことを希望する。

△健全なる國民は健全なる家庭から産まざる健全なる家庭なくして健全なる國民はない筈である。家庭が人物を作るに大なる關係あることは古來の通説である。世界中紳士の典型を以て目せらるる英人は皆之れ健全なる家庭から作り出されるのである。ナポレオン一世嘗て歎して曰く「現今佛國の大に必要とする所は母なり」と云輩は日本帝國の現時に於て特に賢母の必要を感じてをる。今や人格の典型として米國人間に於ける崇丹の中心となれるのみならず其の偉大なる人格は巍然として世界の注目を受ける。米國大統領ルーズベルト氏曰く「婦女他に嫁して子女を養育の勞や少小ならず之れが爲めには其全力を注ぎて辞する所なく會て其間に微塵だも利己の念を挿さず見よ斯くして其懐に嗚々乳を求めたる一小兒は遂に長して天下の人傑ともなるべきを、されば一婦人又軍人の如く政治家の如く公生涯に於て將

た私生涯に於ても等しく最善最難の大事業を成就したる者と同等の班に列すべきものなり」と之れ婦人の天職を道破して餘あり。吾輩は婦人諸君が宜しく婦人の天職を自覺し最善最上の光榮を獲得せられんことを遙に希望する。

△序に曰ふが吾輩は加治木村の繁榮等につき具體的に卑見を述べ以て同郷諸君の教誨を請ふ。賦りて先便に一寸豫告しておいたが何分目下の境遇は日曜なしの業務大多忙殊に今は療養の候で心身の疲勞を覺へてをるから貴重なる睡眠時間を割くことは中々惜しい。追て燈火親むべき時節到來を待ちて筆を執り通信することにやう。

雜纂

看護思想普及の必要

宮内 盛直

人衛生を説て看護を説かざるは何ろ、衛生の論喧噪なるに反して看護思想普及の聲寥々たるが如きは蓋し現代の欠陥なり、わかた城に於ける衛生の發達や固より幼稚ならむも、吾人は當面の必要より先づ看護思想の

普及を絶せざる可らず、看護と衛生とは物の両面に於て相離るべからざるは勿論なり、衛生の真相を遂觀せば看護の如き自然に默識神通するものあらむ、而かも衛生の真相は深し研究實驗相重ね來て後領悟し得べきものなりとせば、具體的に看護衛生の一般を普及し、以て健康を維持且つ増進するが如きは一地方の事業のみにあらず、實に國家的事業としむべきか、諺に曰く一は看病二は藥と、これ臨床上千古不磨の金科玉條たり、而して吾人はこの看病なる語を以て尙ほ攝生の意義にも解するを得へし、人未だろの攝生を行はず而かも、醫の診断と藥にあらは万病に對する能事了れりと思ふか如き、抑も醫藥を盲信するものといふへし、斯くいはいは氣の速き輩はいはむ、誰か斯ばかりのことを知らざらむや、吾輩は醫藥にのみ依らず大に攝生を遵守すこれ日常のことたるのみぞ、それならむ、豈う然らむや、吾人臨床醫家は賢明博識の人士にして非衛生的の所業を敢てし以て疾病の經過を不良ならしむるに、毎常遭遇する奇怪の事實あるを如何せむ、斯くい吾人すら非衛生的の爲めに驕馬も及ばざる後悔を遺すことあり、難哉攝生の實踐、危哉衛生の躬行。

徳の脩らざる不善の改る能はざるは吾愛なりとは大聖
すら尙且つ歎つ所なり、衛生の實踐躬行は恰も道徳の
それの如く、克己復禮の大決心なくんば容易に佳境に
入るを得ず、衛生の道は大に倫理宗教の修養と相待て
るの效果を見るを得べけん也。

斯くて自力的衛生の困難なる尙は自力的宗教の一般衆
生を濟度し得ざる如く然れり、こゝに於てか吾人は
他に一法を求めざる可らず、吾人は之を他力的衛生と
稱せむ、即ち看護者の他律的業爲に依て衛生の大道を
蹈み外さるるを期する也。

單に看護者といへば重症の床に呻吟せる人に附添ふ者
のみを呼ぶに似たり、是れ無理ならぬことなれども、
吾人は看護者を以て廣義に解釋せるなり。
假令藥罐を携帶して醫家の門を訪ふ輕症の人に於ても
、家庭に於ては主婦の他の或る人々はるの看護者の
地位にあるなり、必ずその病名を審にし服藥の規律飲
食物の如何を了解して、之を看護するの心得なかるべ
からず、彼の憐れなる最愛の兒女をして子守の脊中に
委ね、覺束なき容膝の陳述を醫家の前に演せしむるが
如きは、實に看護思想欠乏の例證たり、腸胃の疾病に
罹り、粥汁牛乳等の流動物を與ふべく命せしに、傍ら

駄菓子を見舞うて愛孫の歡心を買ふ祖母公あるに至て
は、また沙汰の限りといふ可し、吾人は主人公の權威
に僻易して我儘を透さしめ、病を膏肓に入らしむる妻
女の責任を問はざく欲す、因習の久しき途に病的傾向
ある酒客をして、禁酒若しくは節酒せしむるか如きも
、吾人は尙は看護の一に加へんとす、由來酒は養生に
害ありと呼べり、吾人は衛生道徳上の禍根を去除すべ
く禁酒を主張せむ、然れども之を一般に望むは悲哉空
想に終らむのみ。

彼の育兒法の如きも、尙は看護術の一にして衛生的に
小兒を哺育するは、文化の恩寵に浴せる吾人か決して
閑却すべからざるの要件なりとす。
看護の意義を擴張して論せむには、尙ほ他に幾多の細
目は挙げ得られむ、要するに看護は醫藥よりもより大
切なるものなるを會得して、特別の注意と趣味とを以
て、病者に對せむには病者の幸福豈また偉大ならずや
、抑も生物には自然に疾病の治癒機能を有す、之を自
然療能といふ、吾人の醫術は實に此の自然療能を補助
するものといふて可なり、其補助するに巧拙あるは、
即ち醫術に巧拙ある所以なり、故に嚴格に看護と衛生
との法を盡さば、必ずしも醫藥に依らずして治癒する

疾病、また二三に止まらざるなり、彼の發熱發汗嘔吐
下痢の如き寧ろこの治癒機轉の一作用ともいふべきな
り、較近細菌學の發達に伴ひ血清療法の發見せられた
るも、この自然治癒の原理を應用せるものなり、看護
衛生の法は此の意味より推せば、醫藥より寧ろ自然に
近きものにして、造化神功の量を摩するものといふべ
し、古語豈吾人を欺かむや。

看護思想普及の必要既に之ありとせば、如何なる人に
向て此の普及を計るべきや、吾人は看護なる語に依て
直ちに婦人を連想す、吾人は婦人に向て此の普及を計
らむかな、夫れ看護は大に同情心を要す、溫柔にして
同情心に富める婦人の性情が先天的看護に適當せるや
明かなり、看護はまた婦人の天職なるならむや、病
者か此の同情心を歡迎するは小説家國木田獨歩氏のい
ふ所を見ても知るべし、獨歩氏曰く看護婦は素人なる
が病人には快し、患者と共に驚き共に慌てるやうで無
ければ何にもならぬと、仰臥三年の著者も病院の醫員
看護婦の冷酷なるを痛罵せり、病者か同情心に渴仰す
るの一斑を窺ふを得べし、吾人は家庭に専門の看護婦
を迎ふるは特別の場合極めて必要なるを認むといへど
も、民力の程度家庭の狀態よりして一家の主婦たり得

べき人若しくは特志の婦人が、是非其この看護思想に
養成せられ看護術に習熟し、一は病者に同情を寄せ慰
藉を與へ、一は醫藥をして能くその目的を達せしめら
れむことを嚮望して止まざる也。
然らば如何なる機關に依て看護思想の普及を企つべき
や、これ最後の問題なり、假に吾人の意見を提議すれ
ば左の如し。

主婦たり得べき人若しくは特志の婦人に依りて看護術
講演會なるものを組織し、一週一回位特志の醫家を屈
請して之を講演せしむ、傍ら宗教心を養成す、宗教は
天地の心を以て心とし博愛慈悲を根本となす、この心
なくんば假令看護術を習熟するも、憾むらくは龍を畫
いて点睛を欠く一般、その活用覺束なければ也。
以上はこれわが私見のみ、その論する所また杜撰なり
、世の反響を惹き起し得るや否やは固より期する所に
あらずといへども、思うていはざるは腹ふくるゝ業な
り、敢て筆を呵して本論を草す。

帖佐村松原鹽業の沿革

双 鞋 生

電車に搭りて加治木重富兩驛の間を走る人は、かの

琵琶歌「灘めぐり」に聞えたる別府川と思川とに挟まれたる地蔵原一帯の趣き多き松並木街道を北にし、南餅田原を隔て、連波濤々たる錦江の濱に沿ひ、數百の茅屋鱗次櫛比する一村落を見るであらう。これが帖佐村松原であつて戸數四百三十人口二千五百五十、一部落を擧げて鹽業に従事して居るといつても宜い位、それによつて働く、人が働くために生れたといふこの適例としては決して見逃すことが出来ない、他から見てもよく堪え得ると怪み思ふ程全く能く働く。以故松原といへば、直に鹽業一烈しい労働者の居る處と思ひ浮べらるゝもので。

今でこそ尋常小學校の設けがある故に小兒だけは僅に簡單な文字を知つて居る。宗教といつてはお寺が二ツあつて、古い形式に囚はれた抹香臭い地獄極樂一無論漠然たる未來の天地が彼等の貧しき頭腦を支配して居るばかりだ。

風姿に於ても心に於ても、質朴な、單純な、蔑視して云へば智識なき、無意味な、醜穢しい、流行語でいへば、自然に近いといふのであらうか、昔の面影を留めて居るといふのか、兎に角新しい匂ひはほのかぬ、グル／＼の棉巻、チョン髯の老翁、軒の低い藁屋、

煤けた暗い家の中、屋敷を境する垣なく隔てがない、此處の臺所は隣の勝手口に續いて居るといつたやうな、この古色を帯びた人間の間に入つたなら裝飾も容姿も介意はところ、露頭赤足、裸形に近い人間が猛烈に生活と闘ふ有様、働いて食うて、眠つて、かくて老いゆき死に行く自然に近い人間の姿を細密に研究し得るであらう。

詩的眼光に映した松原村に對する觀察は他日に譲つて、茲には二千有餘の住民が父祖時代より生業とし來つた鹽業の歴史に就て、知り得たことを簡単に紹介し度いと思ふ。

塩漬して傳はらない故人の事業、生血を枯らし精魂を疲らして經營した志士の社會的劃策が空しく草莽の間に埋れて了ふのは氣の毒でもあるし遺憾でもある。總て社會の事業が前人幾多の努力に據りて現狀を來したとするならば、その事蹟の苦心を世に傳へ世に紹介するのは、先人に對する後人當然の義務かとも心得るので。

閑話休題、抑も帖佐村松原に鹽業の起りしは、何れの時代を嚆矢とするや、記録の微すべきものなく之を審にするとが出来ないけれども、藩政時代は掛旗（俗

にいふ揚旗）であつたらしい。明治三年時の縣令大山綱良氏鹽田開墾の必要を感じ、縣費を以て堤防の築造を開始し、十一年に至り竣工した。其後十二年頃迄は借地をなさず、自由に鹽田を開墾して製鹽業を営んだけれども、十三年加治木村の林太右衛門氏鹽田掘下げを願ひて許され、惣役人二百名を役使すると二ヶ年、掛旗を變つて入墾となし鹿兒島より斯道の堪能者黒木幸次郎氏を聘して同業者に製鹽法を教習せしめた。黒木氏は池田伊太郎、福留平兵衛等なる熟練者八名を率ゐ來り採鹽の新法を教へて熱心に盡力したのであるが、事半にして此世を去つたので、予息熊吉氏の志を繼ぎ熱誠事に従ひ、現に帖佐重富村の鹽業者惣代として忠實に活動して居る。

十五年林氏借地返上をなし次で鹿兒島の人丹下伊左衛門氏借地をなし經營すること約三年、一號二號鹽田は此時分竣成したのであるが都合ありて返上するに至り、十九年加治木郷友會より借地掘下げをなし、谷山喜助有馬新松永郷左衛門氏等工事監督して三號鹽田を拓いた竣工したのは二十五年、小濱氏興氏始良郡長時代のことである。

其後特筆すべき事項もなく今日に及んだ。近頃沙廻

りを疏通せしむるために溝を浚渫するやら溝中に浸かつて居る鹽水桶を引あげて各自の製鹽場附近に整頓するなど面目を改めたので鹽付もよく鹽の實質も漸次宜くなりゆくやうである。

總て何の事業に限らず、一事業の成るゝや、必ず悲惨なる犠牲者を見るのであるが、松原鹽田三十餘町歩の開墾と製鹽業の今日に至る迄には、又幾人かの氣の毒なる犠牲者を見るのである。

黒木伊三次氏は製鹽業に於ける其一人で、今も現存する人であるが氏が斯業に熱心なると實に感に堪えてゐる。松原鹽田に鐵釜を用ゐるやうになつたのは實に氏を以て嚆矢とするので、氏が率先して鐵釜を用ゐなかつたなら、松原の鹽業はあれ程早くから知らるゝに至らなかつたのである。

明治二十五年頃鹿兒島市の鐵釜製造者某説くに從來の薪代釜（細き割竹にて編みたる籠の内側を、鹽水を以て粘ねたる土にて、一尺餘の厚さに塗布したもので、長く保たれて二週間）の製造に面倒で保ちが惡く不經濟なるを廢し、鐵釜の長く使用に耐えて經濟的なるを用ゐた方が得策なるを以てした。官減法に舊習慣を墨守したがるのは、頭腦の古い地方人によく見る大方

の人情であるが、此土の人は殊にそれが酷い、現今でもうである。例へば、この婦人で他國に出て居たのが歸郷するとする。郷里境から結ぶて居た髪を破壊してグル／＼の棉巻きにし、手織木綿の着物に細帯、裾端折つて在所に入らねばならぬ、白歯で居たら黒く染めねばならぬと云つたやうな習慣の處。此一事以て萬事を推測するに足るのだ。

鉄釜の説明をきけば成程宜さうである。然雖昔から使用し來つたものとは比較でないやうな氣がする。加之鉄は錆が出るとか何とか強いて難癖をつけ度なる。何しろ頭腦の中は自分のものより勝れたものはないといふ考が先入主となつてゐるのだから、使用せぬ算盤計り考へてゐるので、飲点のみ探し廻る。遂には一も二もなく悪いものに定めて了ふ。

ろういふ輩の中にありて、黒木氏は獨り手を拱いて考へた。在來の網代釜のこしらえに面倒で、保ちが悪くて、萬事不便利なるに比べて、鉄釜は保ちが長く煎煮に便利で、安全で、利得は見えて居る。これは使用してみるに限る。萬一成功するに於ては、獨り自分のみの利益ではない、松原全郷の利益である。是非自分が最初に創めねばならぬ。かう決心した黒木氏は、直

ちに鉄釜を購入して、煎煮を試みた。最初は手加減が拙いのか、思はしい結果を見なかつたが種々心を悩まして工夫した揚句、見事な釜が出来上るやうになつた。けれども頑固にして愚なる同業者等は、鉄釜で焚上げた釜は、鐵毒を含んで居るとか何とか云ひ所すので、折角苦心の餘になつた釜を買ふ人がない。それ見たことか、先祖傳來の法を廢めて鉄釜など創めたつて駄目なこつた、罰でも當らなければ結構だなど毒口と利く。かゝる冷笑と嘲罵の中にありて、困窮に陥ると三年、自ら信ずる處は堅いけれども、周囲は皆群盲頑愚の輩、せんなに説いても救へても利目があらばこそ、冷笑は一層甚しいので悲憤絶望涙を吞んで全く鉄釜を破壊し去らんとしたこともあつたといふ。處が或時釜を焚上げて居る處に購入者が來て、皆衆の釜を買ひ入れて居たが、速て氏の製釜場にやつて來た。賣らな

いかと詰く。
「この釜は鐵釜で煎煮たのです。鐵毒が雜つてゐるといひますが、それでもお介意なくは無代で差上げませう」

客は零時如患いつた氏の顔と、それから釜を見て居たが

「鉄釜で製へた釜に毒が含まれて居るとは信ぜられぬ。加之、貴郎の顔を見ると、酷く心痛の容子に見受ける。試みどもならう普通の價で買ひます」

「さうですか、それは難有いですが、併しお氣の毒です、それでは無代であげると云つたのですからこゝに一俵あります、是れは進上しませう」

自今始めて氏の釜が賣れるやうになつた。そして鉄釜で煎煮した釜も食うて差支ないといふことが信ぜられるやうになつて、鉄釜を用ゆる者が漸次増加するやうになつた。その初めて釜が賣れた時は嬉しさの餘り覺えず泣いたといつて居る。

此間氏の苦心は一通でなかつたが、飽迄、進取の氣象と、思ひ込んだとは遣り徹さず思ふといふ剛毅なる氏の決心とは、一家をもあげて犠牲とするの覺悟半平として積くべからざるものがあつたが、裏面いか計りの悲痛なる事情があつたか、その幾多の事情と障礙にも屈せなかつた氏の精神行蹟は、實に輝きある一篇の立憲談といふべく、松原製釜史の光彩であつて全時に當村民のはこりといはなければならぬ。

先覺の士は皆昔から迫害せらるべき運命を有ちて居る。古今東西の歴史の頁を翻す迄もない。近くわが玉

政維新の初め幾多先覺の志士は悲壯なる革命の急先鋒であつた。呼喚呼狂任人呼といひ、唯皇天皇土知有と呼び、誰れ日本古狂生と呼んで皆時代の醒めたる犠牲者たるを甘んじた。それとこれとは事蹟は違ふ、けれども大きい小さいばかり、その精神氣魄に至りては、秋毫も異なる處はない、黒木氏の如きはその精神行蹟正に閭閻に旌表せらるべく値ひして居ると思ふ。(四十年五月稿)

疾病に就て患家の注意

長崎醫學專門學校 福 永生

確固たる精神は健全なる身軀に宿ると云はれたるが如く人若し其精神を健康ならしめんには宜しく先づ其体を健全にすべきである、而して体の健康法と一口に云へば病に罹らぬ用心さへすれば既に事足れりである、然し悲哉誰れ一人として或は軽く或は重く病に未だ一度も罹らぬと云ふ人はないのである、故に若し不幸にして病に罹つた時は如何にすればよろしいか即ちに消極的健康法とでも云ふべきものを述べていかなやめる同胞の感を解かん。

先づ初めに病は如何なる性質のものであるかを説く必

要がある抑も病たるや健康の範圍を外れたものであつて其外れ方が大きく又小さく即病に輕重を生じ且つ其外れ方が或は急速に或は緩慢に即病に急性と慢性との別を生ずる、又全く健康に復するにも急、慢の両性がある而して病の輕重は病める人自身が凡る之を知るも永引く病か早く癒る病かは多くが之を知らぬ其爲め種々の感が之から生ずるのである、一休病は各経過と云ふものがあつて早く癒るものと永引くものと初めから分つて居るもので其経過が来なければ癒るものではない一例を挙げれば風を引いて藥を飲む軽い風なら僅か一晚で癒るが然る皆等の病氣がどう計りは行かぬ或病の爲めに一月或二月或は一年二年も苦しむのは皆人の能く知る處である、之は醫者が悪いのでもなく又藥が悪いのでもなく即病のものが悪いのである言葉を換へて云へば其病が永引く性質を有してゐるのである、故に若し諸君が病床に臥するの不幸に陥つたならば早く癒る病か否かを問うて氣ながに療治せねばならぬ、能く聞くことは今迄何ヶ月も某醫者に權つて居るが一向輕快にならぬから醫者を代へて見よう云ふ人があつた之は先に述べた通り醫者の罪にあらずして病其ものが永引く性質を有してゐるものなることを承知して

貰ひ度い。
藥は何の爲めに飲むかと云へば無論病を治す爲めに用ふるものであるが之を用ふるに付ても又多くの感があるから左に之が目的及其作用の一般を少しく述べよう、先づ假りに二ヶ月位の経過を有する病に罹つたとせん第一の醫者に一ヶ月半かゝつて少しは善くなつたがまだ思はしくないから醫者を代へるとする其醫士は半月で治したと云つて大評判になる第二醫の好評はいゝが第一の醫士こそ實に迷惑の至りで此の批評に對しては人知れぬ苦痛を感じる何と諸君殘酷な批評ではないか、病人は治りさへすればどの醫者にかゝるも勝手ではあるが若し徒らに醫士を代ふるに於ては醫士の迷惑のみならず患者自身の不幸となる場合が多々ある之は後で藥の條で委しく述べるつもりだ。
諸君先づ谷間を傳うて流るゝ河流に付て考へよ今此河流を或場所にて塞がんとすれば其一部分は爰に滞ると雖大部分は必ずや溢れ出て忽ち又下流を爲す此下流に數ヶ所乃至數十個所の堰を設ければ水勢少きに於ては遂に全く止め得る場合もあれど水勢多ければ數十の堰も之を能く止め得ざるにあらずや病氣も殆んど之と全一なり病は其河水にして藥は其堰に例うべきである

、今病の半にして醫士にかゝつたとせば川の中流に堰を設けたると全様水が溢れ出づる如くに服藥中にも病が増悪することは少しも怪しむに足らぬ然し服藥中増悪する如き場合に於ても水が堰に依て幾分滞ると全様幾分か増悪の度を減することは確で服藥せざれば一層増悪の度を急遽ならしむるものなることは又明である、或人は醫士にかかつてから反つて病氣は悪くなつた恐らく之は醫士の誤診で藥が其當を得ないのであらうと云ふ之も然し前述の理を能く解せば自ら其誤なることを自覺して其惑は解けるであらう。一休病は甚だ複雑なるもので單一でないから其診斷を下すに付ては悉く誤りなしと云ふ譯には行かぬ若し患者自身が其診斷に疑を存するに於ては主治醫に相談して第二醫の診察を乞ふことも決して悪くはない、之は即醫者の立合ひなるもので其結果誤りなることが判然せば患者自身の最大幸福である。

一病起つて萬病起ると云ふ言葉の通り一病氣にかゝれば爲めに他の二三の病氣を併發する場合が多い或病氣を治すと共に其併發すべき病をも未發に防ぐ方法を講ずるのは之れ醫者たる者の責任である今其の藥劑が兩作用を有するに於ては只一品で事足りりとするも兩

作用なき藥は止むなく二種以上の藥を用ふることになる即一ツは水藥として其病に用ひ他の一ツは散藥として合併症の豫防に用ふる所以である、斯く云へば水藥と散藥の二品にせず一所に混して一品にしたらばその間を能く起す人がある勿論混合し得べきものは混合するが二種以上の藥品の混合により茲に化學的變化を起し變つて毒物となるものが多々ある、故に混合することが出来ぬのである、或病に用ひてこそ藥となれ之を他に用ひては毒となるものが多い例へば熱病に解熱藥を用ふれば其病には効を奏するが全時に心臓には害を及ぼす作用がある、こんな場合には豫め心臓を害せざる様他の藥を以て之れが防禦法を講せねばならぬ此に於て二種の藥を與ふ可く余儀なくさる然るに人之を知らずして二種又は二種以上の藥を與ふるは徒らに醫士の金を食らんが爲めのみと迷斷するは亦邪推も甚敷い。
藥も其度を過して永く連用するに於ては体内に蓄積して之が一時に其作用を起し良藥も變つて毒物となる例へば三週間以上續けて用ふべからざる藥を第一醫二週間用ひて後第二醫に代へたとせば前醫が之を用ひしは知らずして第二醫全藥を用ふること二週間又は三週間

に及べばこれこそ一大事既に適度を超過して毒物と變
ト病氣は一層増悪するに至る此に於て患者は第二醫の
拙劣なることを訴へて止まず、之れ果して醫士の罪か
、其罪を問ふ迄は、遂に患者は不幸の運命に陥る
を免れぬ、患家の歎きや一方ならず恰も醫士が殺せし
かの如くに吹聴する世に之れより大なる感あらんや
である、要するに轉醫の害は醫士の迷惑のみならず患
者の不幸一層甚だし之れ余か切に轉醫を戒むる所以で
ある然し以上述べし処は概括的の理で皆な悉く如斯と
云ふにはあらず中には例外もあることを承知して貰は
ねばならぬ。

なほ終りに注意迄述べて置き度いのは小兒を往々子守
なぞに托して診察を乞ふ人がある病氣に依ては先きに
本人の煩らつた病や又親が以前罹つた病氣なども聞く
必要があるかゝる場合に子守では一向要領を得ぬから
小兒の附添人は必ず其母たるべしである今一つは服藥
の折藥瓶の張紙に注意して其食前食後の如き又は分量
の如きを嚴重に守ることである食後とあるを食前に服
すれば空腹の爲め藥は變トで毒となる場合もある殊に
二度分を一度に服する如きは又愚も甚だしい數醫者の
長談議は諸君に失禮此位にして置かう。

孤案獨語 (其二)

在大阪

池田孤案

△予は前號に於て孤案獨語と題して、前後錯雜意味晦
澁の文字を弄し、借越を敢てして聊か自他の戒めにも
と本誌の餘白を潰したたが、予や元是れ一介の素寒貧、
素より侃々諤々の議論家たらん野心も、一定不變動か
すべからざる卓抜の識見家たらん慾望もあつて、はな
い、殊に予の業務は筆硯に親しみ能ふは、爾かく閑散
なものでない、然るに持つたが病ひの横好きに用事
の都合も思はで、前號に(其一)としたのが予に取て大
の失策、飛んでもない災難を招いたものかな、と悔めど
詮なし、此に二たび零コンマ以下の頭腦を叩いて(其
二)を書かずに居れない仕宜となつた、叩いて見ると
意外！憂々怪しげな音をなして打出されたのが則ち是
れ、幸にして枯れ木も山の賑ひとなれば予は他の慾は
ないのである、毀譽褒貶は諸君の御勝手たること亦勿
論である。

△凡る人の世の思ふに任せぬ事の多きは今更謂ふまで
もない、然り予は吾友より吾家より、否我れ自からよ
りも常に幾多の不平と怨嗟とに接するものである、之

に對して予は友を慰めて生命の流を示し、家人を勞は
りて暗さを照らす光を仰がしめ、更に自からをも樂地
に導くことを努めて居る、一たび事敗れたからと云つ
て直に天を尤め人を怨み身の不遇を嘆ト、二たび手に
唾して勇氣を百倍し、更に新進路を見出すことをせず
して、姑息に流れ忘想に耽り空中に榮華を夢みて目を
送るやうな意氣地のない人間は、いつまでも空しく千
仞の谷底に彷徨いて遂に浮ぶ瀬はないのである。

△見よや宇宙の千態万狀を、幼時才名一郷に鳴つた俊
才子も、一たび世渡りの綱切れては哀れ無慈悲な末路、
折角頼んだ木蔭に雨漏りて即刻退去を命ぜられ、露し
けき鎮守の森に行き暮れし一夜を明かし、抜け少く頼
む方なき身の上となつては、マツチの空箱一つ貸して
呉れるものもない、嗚々人生何たる悲惨の末路ぞ、人
間も斯うなつてはいかなコッポ博士も一寸匙を投げる
であらう、凡る世間廣しと雖も、事業多しと雖も、力
の及ぶものなく手に合ふ職なし、途方に暮れ思案に倦
み、果ては心的病魔の襲撃を受け、雨暝しの圍居然と
して友人を訪うて留守を食はされ、親族の門違ひして
拳突を喰まると云ふに至つては萬事休矣で、人間愁
傷の極点惘然の行き止り、サッとは世の同病に値すべ

く餘りに振はぬ話ではあるまいか。

△世の中の萬事は一に其人自身の覺悟如何にあるのだ
、不撓不屈の精神の存在を認め得る間は大丈夫だ、若
し夫れ青雲を踏み脱して策盡き術亡び、進退爰に谷ま
つて神塞り氣屈せん折り、何も急いで厭世家にならぬ
でも、煩悶せぬでも、吾人の前には文學で人重寶な難
有い、新生命を吾人に吹き込んで呉れるものがあるで
はないか、空想亦空想、五里霧中に彷徨して徒にま
ならぬ浮世を嘆ト、壯志伸ぶるに由なき時、平田篤胤
の傳と書とを讀み、彼が家傳の衣をさへ質屋の蔵に托
したる貧乏、廟堂よりも儒者よりも苦められつゝ猶且
つ挽きざりし氣根に感ト、或はフイーールドが傳を讀ん
で、千挫屈せず遂に海底電線を布設したる條に至れば
、成功の冠は決して眠れる犬の頭に落ちざることを知
るであらう。

△更に又エマーソンより其樂天説を聞き、孔夫子を學
んで仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣と教へられ、或は科擧者
の示すまに、萬有を觀せんか、吾人は氣自から開け
心潤く伸ひやかなるを覺へるであらう、三國誌を讀ん
では桃園に義を結びたる、玄徳關羽張の交情の如き、
隆中三顧の談の如き、孟獲の擒七縱の如き、凡る人

生の教訓は擧げて此中に存するを知らん、時として公會の席に出で、偉人名士の活ける卓説論議に接して經國濟民の志を起し、胸中野卑の念消へて晴天白日の感に打たれる、事もあらん。

△違なき身にこそ悲しき人にこそ、文學の趣味と教訓とはいふ加はるのである、店頭に座して算筆手にする市人の損益に悩まされし頭を洗ふもこれ、鐵の柄に汗を流せし農夫に晝の疲れを忘れしむるもこれ、商工業家之れあるが故に餘裕を得、學生之に親しむこと深うして益々新趣味を覺へるのである、然らば一敗地に塗れて二たび起つことを知らざる無氣力者流のみが獨り之に與かる能はずと云ふの理由はない、予は常に世の有爲の青年が自から求めて身を不定の深淵に沈め、妄りに不平を唱へて修養を怠り、煩悶に煩悶を重ねて無爲徒食、曾て進取の氣象のないあたらし人の身の上を視る毎に、何故に斯る難有き興奮劑を用ひぬのかと思議でならぬのである。

△失敗は吾人に好刺激を與ふると同時に亦大に吾人を啓發するものである、一たび敗れて頓挫する様では世の中の事一として成るものはない、世路の波は澎湃たり、白霧濛々前程を鎖して茫々亦渺々咫尺を辨せず、

雨か霞か將雪か、一雨一時旦夕を卜する事は出来ないものである、而して人生の浮沈窮達は必ずしも靜止するものでない以上、一進一挫は到底免るゝ能はざる數であることを思へ、凡る事は非常の奮勵ありて而して後始めて非常の効果ありとせば、此轉變極りなき世海に棹して目的の彼岸に達せんとする、亦決して尋常一般の覺悟では駄目である、要之吾人の世に處する常に野卑の念を去つて清高潔の志操を研磨し、一方亦事に當つて不屈不撓の鉄腸の鍛練則ち精神の培養に勉むるならば、如今此紛雜多端なる社會に處して庶くは違算なきを得んか、學術技藝亦素より必用なれど、コハ蓋し枝葉であつて精神は其本位である、予は斯く書き來つて勢ひせうしても謂はねばならぬ事の數々、胸裡に浮ひ來る百出の所感を、思ふ存分に書き振つて見たいが、乍然退いて考へて見ると、前に多くの先輩や高學の士を控へて、いづれコンマ以下の末輩たるを免れぬ予が、さるで冒馬に鞭を加へたやうなるものを書き綴つては、如何にも其僭越不遜の甚しきものあらんを恐るゝが故に爰には多辨を慎む。

△翻て吾郷青年諸君を見るに、予が前號來述べた様な無氣力な、意氣地のない、薄志弱行動もすれば厭世家

の鑿に倣ふ様な不幸なる否寧ろ慄れむべし青年は只の一人もない、と云ふ事を予は衷心大に感ずるものである、想ふに是れ我郷は早くより先輩有志の諸士が、教育に力を致されたるは勿論なれども、一方亦先覺諸士が世運の推移に鑑みて、便宜要所に有力なる青少年の團體を組織し、社會的殊に精神的教育の道を講せられたる結果、多大なる恩恵を蒙つて居るものと、予は確く信ずるものである、今や亦何の幸ぞ、我郷は縣下の他町村に先鞭をつけて、雑誌「檣城」なる好機關を備へ、而かも健全なる發達を遂げつゝある今日、願くは郷党相戒め相扶けて、益々各方面に於ける良績を收め、以て吾國模範村として花も實もある加治木村たらしめたいものである、途中幾度か筆は横道に走つて殆んど讀むに堪えぬものとなつたが、其処が則ち生唐芋は喉につまる所、惡しからず御勘辨を願ひたい、味も香もなき下手の長談議は恐れあり、前號にも多言を費したから大に遠慮して此位で一先孤案獨語の稿を結ぶ、(明治四十一年八月二十五日稿)

文

苑

旅日記

館生 田方露香

我が都文館は今夏八月四日より都城、小林、加久藤、横川四泊の予定にて修學旅行をなしぬ。全行十名、我れも又其一人たり。紀行書くべく約して二本の足重きにたえず。廣く名所古蹟をさぐりありくべく餘りに暑くして遂に大失敗。僅かに道中歌ひし歌ぞも書きつけて其責をふさがんとす。もとより似非歌。しかも道中無關係のもの多し。折りにふれての感想なればいたしかたなしとして請恕。

八月四日。午前一時出發。都城一泊の豫定なり。高きは電柱の如く、低きは地を這ふに似たり。高きは誰ぞ、問はずして知る此行の總指揮官原田武雄君にして地を這ふは大車兼行君。各雜費を携へ日傘一本を手にした。皆握飯の多大なるを誇り唇を談笑して行く。鶏鳴徒らに喧しくして四隣閑寂、今五時間を経ずして活動すべく静寂を保つ加治木町もまたこれ寂々。東天暗くして此夜何時明くべしと覺えず、一行を導くはたゞ一提灯のみなり。しかも青年頑鉄の手にすべく餘りにチツボクなるを如何せん。

かしましき活動に入る一瞬の前をえらみて我れ市
を行く

小濱に至る。海暗ければ波の音なし。漁火点々星の
如く、折々四方に人呼ぶ聲のするは獲物ありてにや
彼等が松幹の如き手に網する姿、暗くしてわかね見ゆ
るおもひす。あゝ活動！ふとわれはかく叫びぬ。さな
り、狂瀾怒涛、千丈さかまく大海に一葉の扁舟を浮べ
て漁する漁夫。大洋を横きつて彼我の貿易に従事する
商人。げに小なりと雖我等靈長、智識の類をのばす毎
若何われに如かめや。男子の熱血湧いて胸の熱鳴る
を覺ゆ。

濱之市又眠りの中に過ぎ、敷根に至る頃、東天朱黄
色を帯び冷々たる朝風、青田を撫づるまゝに麓は東よ
り明け初め、仰ぐ空は星一つ／＼消え去つて、たゞ明
星のかすかなるのみ。あゝ東明時の空の色如何に美し
く花やかなる。刻一刻に明け行くなすまい、とする
どやがて輝く光線目を射るけはいに雲を破る時、誰か
快哉と叫び更に又黙して大自然の美にうたれざる。常
ならば未だ白河夜舟の我れも牧之原に至る里道の草原
にしばし身を横たへて畫中の人となりぬ。

美しき理想の國もより來やと胸の戸ゆるす朝あけ

の空

朝の海霞はれゆく遠方に白帆浮ぶを百合よと云ひ
ぬ

霞より歌は流れぬ泉より戀は湧くなり野に出で
見よ

牧之原は八時なり、暫時休憩す。此所より都城に至る
間始んと松並木をもて埋められ、道の邊の草間には百
合、野結縷等葩に優に咲きうろひたり。原とは名のみ小
丘接嶺起伏して、たゞ其間田畑の点綴するあるのみ。
通山にて晝食す。生豆腐の今日に限りて如何に味あ
りし。山海の珍味も何れに如かんやなり。熱日、
中天にあり、柱に倚れば睡魔しきりに襲ふ、爰時にて
もよし、華胥の國に入らむとすれど談笑の聲喧しくう
たゝねの恩恵にも浴し得ず、即ち發す。此日朝來清風
常に衣袖に入つて、松風琴瑟の響きをなし、蟬蛩たる
樹影白日をさへきり涼氣身に沁むを覺ゆ。此邊の並木
松皆彈痕あり、西軍戦役の名残りなりとぞ。行く處依
然として山、依然として岡なり。眺めむとして目をさ
へきり、歌はむとして何詩興を喚起せしむるものな
し。たゞ霧島山の左手に高く聳ゆるのみ。都城地方（友
川煙君の調査によれば、都城は、上古都島、中古島津、

或は莊内と稱しきといふ。永和元年、領主北郷義久、

この地に城して郡城と號す。随つて郷名となる。莊内

とは萬壽三年、太宰の大監平季基、宇治の開白頼道に

告げて、此地に來り曠野を開拓して許多の田地を得、

盡く公の莊園とし、莊衛を立て、自之を掌り、其莊園

を稱して島津の御莊と號し、畧して莊内ともいひしよ

り起れりとか。後建久年中、惟宗忠久、三國の守護職

として當國に下り、島津殿と稱せし由なり。因にいふ。

島津氏は、忠久より十五代の間、出水郡水牟禮城にあ

りしが、五代貞久に至りて、應兒島東福寺城に移る。

島津氏の莊の起因は斯くの如くにして起り、季基の後

嗣富山某、萬壽三年、始めて莊衛を立てしより、元弘

年中に至るまで三百年の間、世々莊衛に居て、遙かに

領家の命を承けて莊事を掌り、又近く守護に順ひて其

職を奉せり。斯くの如くして、島津の莊は漸次擴大し

都城若は五時頃なりけむ。先發の長井君橋上に我等

を待たれしを以て、共に／＼旅館に入る。

食後自由散歩。或は中學校、或は官衙、神宮、各欲

する處に赴く。

在都城稅務署員伊地知新君は我等一行の爲めに旅館

を求め、酒、菓子を設けられしかば飲み且つ食ひ且つ

談笑して興會更にふくるを覺えざりき。異郷にあるも

嬉しきは同郷の情なるかな。

背の低い坂廂に軒は傾き、柱は朽ちかゝり、光線の

少ない、それでも日がさしこむと見えて、東側の茶店

には簾がつり上げてある陰氣な家が両側に並ぶ。家の

前には鶏が二三羽、犬は尾を垂れて食をあさり廻り、

ガタツリ馬車は笛の音も長閑かに松のトンネルをさし

りゆく。都城を離る事數町、小林に向ふ街道はかくし

て初まるのである。

宮崎縣は北海道と比較する位、土地が未だ十分開け
てゐない所と聞いたが、都城附近はさほどでもない。
町の有様、道は／＼が廣く、両側には柳が青々ど繁つて
鹿兒島にも譲らぬ位に見える。林立せる工場煙突は
煤煙濛々として白日をさへきるかと思はれ／＼の
響き絶間なし。農民は耕作に熱心也、一寸茶畑のばか

に廣いのを見るのみにてもすべてが奈何に發達してゐるかと聯想される。聯隊は目下設計中と云いたが出來上つて壯丁が入り込むやうになつた曉の繁華はさうだろ。惜しいことには水によりて得る便利がなく、陸に文明の利器の恩恵がないことだ。それにしても有形無形共に目醒ましい變化、寧ろ喜ぶべき進歩は見えてゐる。當地の實業家、教育家、宗教家等は胸中何等の設備がある、成算がある。實業の地だけに市内を歩けば店頭は陳列せられたる商品、看板、煤煙、見るものごとくに目新しいものが多い。けれども足一歩市外に出れば、廣漠たる平原の中を過かに通ずる一條の大路、槍長刀の大名行列が心の中に浮んでくる。スク／＼天に向ふ松並木や道端に密生せる林や、林の間の藪蒼屋根、いづれとして昔の夢をくり返さないものはない。

八月五日の午後七時半頃、颯々とし、此街道にあらはれた十五名の青少年がある。和服の人、洋服の人、いでたちはどろ／＼だが、皆傘と雜糞と云ふ姿、云はずもがな昨日都城街道にわたる打ち振つて炎日の中を猛進した我等の一行である。

十五名はちらばらに歩いた。空は曇つて風が吹く。地面は打續く日でありひからび居るので、吹く風に

矢つ張り好きだ。

近道でもあるし大古の空氣はあくまで吸はれると思つて新田に至る近道を取つた。近道に入るとすぐから曇つてゐた空は雨を降らし初める。風は横から攻撃を初めて雨を衣服にたゞきつける。全く一時は狼狽の姿であつた。

晝飯は新田の茶屋で食つた、コ、コ、と馳せ出た鶏が僕の食前にくねんと立つてゐるのを見て、草枕の一節を思ひ出した。一人の自然書家が田舎の一軒茶屋に休憩した條の癖である。そこまでも古色を帯びてゐる趣がありがたい。

新田を出發する時は雨も止んでゐたが、松並木を通過する頃から又降り出した。昨日まで右手に見た霧島は今日は早左手に、よつかりと突立つて遠々と天地を鎖す雨をしのいで聳えてゐる。今でこそ黙して居るが、其幾白噴の側の一分子が悉く震動爆發するかと思はる。程の音が遠い／＼奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上がつて来る様でならぬ。

雨ど風どの中を我等は噴火山の勢で走つた。坂路である。雨が止んだと思ふと山はスーッと立つてゐる。硫黄のために赤い花も青褪むるであらう。たゞ怒むら

砂塵があがる、眼もあけられず顔も向けられぬ、砲煙の中、煙塵の中はこんなものだらう。今にも落ちろうな空模様、いつう降れば宜いなど思ふ。道はうねり／＼で長蛇の如く、又一直線に四角張つて、両側には桑畑、粟畑が無限に續いてゐる。其粟畑には年寄つた老婆や、白の手拭甲斐／＼しう冠つた少女が粟をくけつてゐる。山をおろして風が渡るどバツト頭に白が飛ぶ。可愛しい唄が聞える、全く田園の姿だ。

行つても松並木、アーチ形に天をさへぎつて遠くをゆく人の影の如し。並木のどぎれ／＼には田圃が開けて、林に連なる。道は少しく瓜先上りとなる。

行さふものは様々の荷を積んだ馬車とよぼ／＼老爺、野良仕度した娘位のもの、時々自轉車のベルがけた、ましく鳴つて田舎老爺の眼をみはらせる。文明の利器は早い、早いからのんきな田舎人はたまげ、けれど趣味がない。文明の國は米でも骨でも器械でつきあける、蒸氣で車を走らせ、電氣で火をとます、何でも人手をからない、たゞこゝらには未だ左官太郎が所々／＼と長閑かな音を立てるが文明の民には聞鈍いだらう。しかしどうしても趣味がある、うのろい處に云はれぬ長閑かな趣がある、都も宜からうが田舎は

くは今日爆發のない事である。満山大鳴動して天柱さけ地軸ゆらぎ焰々たる猛火九霄につき昇り、漂々たる怪煙この世を蔽ふつて了つたらと思つた。僕は更にかの熱情詩人花外が馬に跨つて淺間山の麓をゆく時の心をもつた。そして聲張り上げて彼が「馬上哀吟」を歌つた。胸はさけ、血はおどり、更に熱涙の双頬を濡り下るを覺えた。

重き愁の身をのせて桔梗、小萩は咲き乱れ、鶉啼くてふ野を過ぎて、淺間の山に來りけり。麓を辿る旅人吹き、仰ぎ見すれば空ぎはに

鳥は迷はず、木は生ひず、高く聳えて、遠く飛ぶ。首くれば、わが袖と夕陽をよけて進みゆく壯なるかな水切に

小さき胸に火は燃えて人の思想を燃すなる火にて燃えむかおのが身に寧ろみ山よ、もろ共に

！續けてくだけて冷いん、呪咀の世にうそは歸ら上
 小林に着いたのはこれこれ日が入る頃であつたらう
 、旅館は在小林の古江孫七君の御足勢をわづらはした
 おかげで好都合であつた、其上菓子など御惠與にあづ
 かり誠に謝するに言葉はないのである、小林のさまは
 一言にしてつく、云はく俗悪、これ以上に僕は小林を
 知らない。
 (未完)

詞藻

漢詩

●錦水公百年祭日謁長田邸家廟有感恭賦

鹿兒島縣 薩摩 園 阪本 彰之助

家廟百年祭、堪欽恩、長。壽松綠千古、海日有餘光。

●錦水公百年祭謹賦

鹿兒島縣 薩摩 園 阪本 彰之助

欽仰當時感不窮、武門文學化民風、名山錦水千秋碧、
 君子遺勳在眼中。

●錦水公百年祭席上、賦、前韵

同 上

射場臺上望無窮、一幅布帆趁晚風、秋水如天天似水、

于世、

第七高等學文 進士 教授 濟 齊 山 田 準

武健素成俗、誰知公子賢、含和人似玉、瑤華筆如椽、
 錦水綠千古、名山詩百篇、洋洋祭儀肅、膜拜夕陽前。

●祭儀畢、男爵陳公遺墨于射園坂之邸、延余
 輩觀之、且賜盛饗、席上即賦道志、

同 上

廟貌依然存、名山映錦幃、月沈池半芻、松老幹三圍、
 昭々神來格、遙々德不微、兒孫追遠好、百歲足堪徵。

●錦水公百年祭島津男爵招飲席上作次韻

同 上

君子千年化不窮、遠人今日憶遺風、漫陪盛宴感無限、
 恍坐春光胎蕩中。

●錦水公百年忌辰島津貴爵佳招恭賦呈下執事

高等學文 校長 香 北 澁 谷 寬

老松鬱鬱比甘棠、地接城陰舊射場、歷代碩儒歸墓下、
 當年遺澤洽封疆、樓臺百尺名山近、詩筆千秋錦水長、
 猶有明公繼先者、文星耿耿照高堂。

●錦水院公百年祭所感

鹿兒島縣 新開院 春 風 江 藤 四郎八

名山浮立月明中。

●島津錦水院公百年諱辰書感

鹿兒島地方 薩摩 園 阪本 教意

盛德洋洋錦水公、感恩誰不仰淳風、百年今日祭如在、
 芳魂英魂下碧空。

豈唯善政化斯民、亦是詩篇驚鬼神、幾百瓊瑤留得在、
 松峰之下錦江濱。

●錦水公一百周年祭日謹奉次其名山樓月下賦之

薩摩以呈、島津貴爵、

メグサ、チ 鶴 南 佐々木 寛

仙後一百年、德光猶映發、錦江依舊流、漱瀝浮明月、
 名山樓影高、天風徐吹髮、俯仰懷昔時、景慕長無歇、
 賢名終古傳、詞賦最超越、惆悵桂花秋、良宵何倏忽。

●錦水公百年祭花城貴爵招飲席上即賦

同 上

錦江十里躍金龍、如此良宵難再逢、一醉陶然人未散、
 妍々明日桂長松。

●戊申九月島津男爵修其先錦水公一百周年祀典、
 謹賦賀、公爲花城島津氏第四世之主、賢名
 噪一時、世稱錦水公子、名山樓詩集三編傳

此日水濱逢典脩、篆煙揚處意悠悠、賢明太守今安在、
 回首西風一百秋。

●與神田抱琴遊龍門瀑二首

蜻 州 中 山 親 交

飛來直下萬條泉、亭上對觀人欲仙、風滿空潭雲溢壑、
 白龍躍出斷崖前、千尺飛泉天地裏、樹陰誤聽白雷聲、
 山風颯到碎成雪、恍覺峭寒膚粟生。

●巖屋寺廢墟二首

雙 峰 入 部 龜 治

廢寺蕭々松蘿傳、青苔理運草如煙、碧雲畫棟今安在、
 不聽鐘聲四十年、老樹蒼森罩晚霞、觀音堂廢聽啼鴉、
 春入舊林空見花、如今只有殘櫻在。

和歌

遠祖錦水院君百年の御祭りに
 御慕に杖へあて

男爵夫人 島 津 直 子
千代かけてつきせぬ名こそ残りけれ

錦水公の百年祭に

陸軍中將

大久保 利 貞

しのぶればむかしのかけもみゆるかな
むれのたか牧錦江の月

全

鹿児島市長

有 川 貞 壽

源はふみの林ときくからに

なかれはつきし錦江の水

全

衆議院議員

柚 木 慶 二

もいどせの末の代までも残りけり

きみのほまれのいやたかくして

全

醫 師

中 村 平 輔

そのむかし君かなかめし錦江の

月はいよ／＼すみまさりつて

錦水公百年祭に招かれし折月を見て

同

人

千代をへし松の木のかげにる月の

影こころつれ庭の池水

全

同

人

錦江の波のひかりをうへてけり

松にかゝれる秋の夜の月

錦水院公の百年祭をかしこみて

佐 藤 友 樹

君か見し昔もかくや錦江の

磯山もみち波の上の月

全

同

人

奉る秋の千草のいろ／＼に

おもひで多きけふのみ祭

全

森 山 まん子

黒川の山の端たかく澄む月も

今宵は君をおもひ出つ覽

新派和歌

かゝる涙

田 方 露 香

うつけたる心の奥のいつこよりかゝる涙の湧くやど
思ふ

木の葉をもちろひ興する森にして聖者ふりなる鹿の
群かな

銅鑼太鼓耳を豊する中に居て泣く寂びしさに似たる
悲しさ

あゝ甘き阿片の夢に一時を笑まむともする寂しきこ
ころ

近く秋やすだし虫の聲かれ悲しげにゆく一步一
歩を

今日われは何かけたるし灰渦めるむなしき空を物い
はで見る

君おもふ心のひまに美しき少女等まねく國も見ゆな
り

春の海かすみ晴れゆく遠方に白帆うかぶを白合よど
いひぬ

牧 隆 村

海のはて月こころ沈めむしろ帆のかけにはてなき涙も

あらむ

何となく物思ふ窓小鳥来て木々を餌あさる物おちし

つゝ

乾反葉や倚るところなきさびしさにまろびもしめれ

たうがれ時を

日暮るれば人々なつかし透垣の外ゆく荒き聲もなつ
かし

ともすれば冷たきくらき國見えてこそぬきなれし手
ろやせにける

白芙蓉夕の欄に倚る姉をわかうも見たるなつすがた
かな

胸の國はての遠野に一むらの杜こころ見ゆれかすみか
くれに

颯はも吹きこころつれ胸中の燈臺守よ疾く火をとも
せ

俳 句

秋 季 雜 吟

緑 波

明月や一群飯る俳諧子

初雁や月影白し院の窓

萩菊る女の髪や秋の風

旅に病む月さす窓や虫の聲

切髪の手自秋寒うおはしけり

漫 言

社會主義と自然主義

島津墨庵

△今頃こんな題を出したら、陳腐々々と謂はれるかも知れぬが、現在尚ほ學者間の論争、さては俗人輩の實行なく盛んな有様だから、思ひ切つて此の題を擇んだ。

△人智進むに従ひ、經濟上或は道德上に種々の理想が生れ出づるのは、避くべからざる自然の成行だらうと思ふ。

△併し僕は理想上の事はさて置き、今日の所謂此の兩主義實行に就いては絶對とは言はんが、大体に於て不賛成である。

△今假りに社會主義の國家を建てたところで、決して罪惡消滅や需給投合を期する事は出来ない、況んや人の安心、世の發達を計るに於てをやだ。

△今一つの自然主義に至りては尙ほく面黒い、これがホントに振つてるとでも言ふものか、食ひたければ食ひ、飲みたければ飲み、言ひたい事は言ひ、爲たい事はし、道徳も無用、宗教も無用、何んでも自己の意志の儘に振舞ふころよけれどいふので、結局眞平御免式である。

△そこで此の主義に對して或者の如きは「自然主義は
常に一個人に禍するのみならず、其流行はやがて國
家の亡微を意味す」とまで評して居る。

△之を要するに僕は以上の兩主義に就き、學理と實際
との兩方面より眞面目に研究する事は決して徒事たづねごとで
ないのみならず、極めて必要な事であると思ふ、是
の如き生ける問題に對して、吾々は常に注意を拂ふ
事を怠るべきならぬ。

(完)

△之を要するに僕は以上の両主義に就き、學理と實際との兩方面より眞面目に研究する事は決して徒事でないのみならず、極めて必要な事であると思ふ、是の如き生ける問題に對して、吾々は常に注意を拂ふ事を怠るべきならぬ。

(完)

雜報

◎學事一班
(其五)

●龍門尋常小學校の狀況

一、敷地の坪數七百八十一坪七合三勺、校舎の坪數百三十九坪五合（内五十一坪七合五勺は目下増築中）運動場の坪數四百坪

二、學級數と教員數

學級五學級 義務教育延長せられ本年四月より第五學年を置きし結果教室と教員とに不足を生じ第一學年第二學年は校舎の落成する迄は二部教授編制法を採れり校舎は本年十一月中に竣工の豫定なり

教員數 正教員二名准教員二名專科教員一名

三、職員氏名と在職年數、四十年九月調

長濱三之丞(二年七月)(牛根村) 松下榮二(一年六月)

徳永金次郎(四ヶ月) 永長わか(三年十ヶ月)

丸目あさ(六ヶ月)

四、在學兒童數と區域別

兒童數二百五十三人 內男百三十五人 女百十八人

欠席児童督責のため當校區域内を左の十方限に分つ

德永方限三十人、茶碗屋方限四十人 毛上方限三十

五人 井手向方限二十二人 新開方限二十五人 川

内方限二十七人 石野方限十七人 東木方限二十八人

人 小松ヶ尾方限五人 市來原方限二十三人

本校通學區域は道路險惡人家散在し通學距離遠きは一里半に及び兒童の出校頗る困難なれば上記の如く區域を設け而して區内の中央生徒の集散に便利なる所に集散地を定め何方限生徒集散地及里程を記したる木札を建設せり昇校の際はこの待合せ又こゝにて散することとせり一方限に生徒組合長一人副組合

長二人を置き方眼内の名稱を書したる旗及兒童出欠簿を持たしめ兒童の出欠を明にす

五、家庭訪問 好學心の薄き父兄に於ては兒童に對す

る學校教育の價值を知らず故なく兒童を欠席せしめ
教養上不都合を生ぜしむることあり、かゝる場合に
は職員は親しく其の家庭を訪問して兒童教育の大切
にして暫くも忽諾に附すべからざることを説諭し息
ることなからしむ

又一方限を限り日曜祭日夜間等に父兄をある最寄の場所に集め職員出張して教育的談話會を開くことゝあり

六、毎朝始業前五分間を割て兒童を校庭に整列せしめ正しく敬禮をなさしむ敬禮不可なるときは嚴に之を矯正す又校長は必要に應じ主要なる訓練事項につき訓示を與ふることあり

七、父兄懇話會每年春秋の二回父兄懇話會を開き父兄に實地の授業を參觀せしめ兒童の成績品を見せしめ又知名の人に臨席を請ひ父兄として常に心得べき重要な談話を聞かしむ兒童教育上又社會改良上効少なからざるか如し

入、共同文具購入法 僻遠不便なる土地なるにより品質優良にして價低廉なる文具を學校に購入し兒童に供給す

九、運動會と遠足 毎年十一月三日天長節には 天皇

卅七年	卅六年	卅五年	卅四年	卅三年	卅二年	卅一年	三十年	廿九年	廿八年	廿七年	廿六年	廿五年	廿四年
一	四	四	四	一	一	四	一	二		一		一	一
二	一〇		一	一									
三	二	五	六	一	四	三	一	三		一		一	
三	六		一	二		二				一		一	
三	六	八	二	七	八	一〇	六	四	八	一	三	一	四
三	九	八	六	三	九	八	一六	六	六	二	七	八	六
一	一									一			一
六	四	九	三	五	三	一	四	一	四	二	一	二	二
					一		一					二	一
一		二	一	二	一	一	六	四	二	五	三	九	五
二	一	一				一	一	五		三	一		一
五	三	三	一	四	二	三		一		一		三	一
三		一			一								
四	三	二	一	一	一	一	二		一	一	一		
	一	二	五	一	三	七	四	四	四	二	七	六	六
七	五	二	三	二	三	六	三	二	八	四	四	四	五
五	二	四	四	三〇	三九	五〇	四五	二六	三五	二七	二八	三九	四四

年 種 別	學 度	大 程	高 等	中 等	自 修	農 工 商	水 官 公 吏	士 官 士 官	授 員	教 等 中 小	員 社 會	士 醫	漆 米 在 雜	職 明 亡	無 不 死 合
廿三年						三	三	一	二	二	二	二	一	六	九
廿二年						一	八	一	二	三	二	三	三	一	六
廿一年						二	七	一	一	三	一	一	一	四	四
二十年						二	七	一	三	二		一		四	四
十九年							三	一	一	二			一	五	五

陛下の御誕辰を祝し奉ると共に運動會を行ふ又春季には遠足を試み地理歴史又は理科學に關する基礎的觀念を養成す

十、區民の學校に關する美學 常校の設備不完全なるを慨し兒童教育に熱心せる父兄は小山田委員會の結

◎ 柁城男子小學校同窓會

柁城男子小學校高等科卒業生及未卒業者にして中等

ると左の如くである。

果一昨三十九年價額六十圓のおるがん一畝を常校に
寄附せり誠に美舉と云ふべし

十一、學林地 小山田其有の原野字夏木二町八反三畝
歩に去る三十六年度より毎年杉穂三千本位宛を挿し
已に二万本以上の杉を挿付たり

◎ 柁城男子小學校同窓會員現狀調

松城男子小學校高等科卒業生及未卒業者にして中等學校に入學した者の本年九月現在の狀況について調査するど左の如くである。

明治十九年以後の卒業生現狀調

年別	修業中	修自	商業	官吏	人員	社會	在籍	無職	不死	合計
卅八年	三									四
卅九年	二五									一
四十年	七									二
四十一年	三									三
累計	三三〇二	四八九	二八二	二六二	五二三	四二一	二六八	三七九	二四六	九一八
卅五年	二									二
卅六年	三									三
卅七年	六									六
卅八年	一九									一九
卅九年	一八									一八
四十年	一七									一七
四一年	三〇									三〇
累計	一八九五	一六五	三二二	二二二	三二二	二二二	二二二	二二二	二二二	一八九五

一 明治三十年以後の未卒業者にして中等學校へ入學者現狀調

(第二表)

一 前二者の入學した學校及人數調

大學及大學院六。高等程度の學校中、高等學校一五、高等師範學校二、官立專門學校五〇、海軍兵學校四、機關學校二、陸軍士官學校一七、經理學校一、同文書院二、私立諸學校二九。中等程度の學校中、中學校三二三、師範學校四八、幼年學校四、中等實業學校一七、其他三〇五、

◎錦水公壹百年祭

我加治木學校教育の開祖にして又當時藩藩文學の隆運に貢献少なからず、其文名は遠く漢土に伝振ひたりし錦水公は、寶曆二年六月六日知覽家に生れ、明和九年我加治木家を嗣きて第四代の主となり、文化六年九月十一日享年五十八歳にして薨せられ、本年正に壹百年忌辰に相當するを以て、當主久賢男は去る九月十二日第十時黒川山麓なる菩提所能仁寺に於て壯嚴なる祭典を行はれたり、今謹て其光景を記るさん、

當日は朝來晴れ渡り秋氣清涼恰好の天候なりしが、斯る英主明君を出たせしは我村の誇りとする所、斯る祭典に遭遇するは光榮とする所なれば定刻前より参拜者引きも切らず、祭場は犬童家扶、新納翁等の幹旋により萬般の準備善く行き届けり、やがて男爵の一行二番

列車より來着せらるゝや直に祭典開始せられたり、先づ竹下祭主以下の神官着席祝式を行ひ續て祭主祝詞を奏し、次に同盟教育會長上野喜之助氏の祭文同郷會代表者岩城豊次氏の祭文奉讀あり、夫より男爵、全夫人、令嬢順次に玉串を捧けて拜禮、次に伊藤世傑(舊實業館教授世前先生の裔)、福永太市(全館教授冬日先生の裔)、東豊藏(全館教授夏助先生の裔)の三氏を初めとし一同順次拜を爲し、囃曉たる奏樂を以て式は終はれり、

夫より参列者は幕府の縁蔭に設けある休憩所に案内せられ、男爵の挨拶あり次いで神酒茶菓の饗に移り、やがて公に關する逸事や、能仁寺の昔談など所々に湧き懷舊の情に堪へざるものゝ如かりき、参拜者は大山郡長、村長、鹿兒島新聞記者小林桃園氏全江藤春風氏、一般有志、柁城男女小學校職員生徒等にして祭典後も参詣せし者少なからず、参拜者へは何れも神酒と菓子とを供へられたり、

因に、同盟教育會、錦江義會、當村長其他より奉納物多かりしか、我同郷會より菓子とを捧げ敬意を表し奉り、

祭文

尚教育會及同郷會の祭文左の如し、

郡長たりし稻垣重節氏は、老体を起し微笑を浮べて登壇、年少者の了解し得らる、様、簡易なる語辭を以て、目的の撰採、習慣の恐るべく且つ社會に及ぼす結果の大なる事を、實例に徴して述べ、昔しは家庭教育の如き口にこそ八ヶ間敷く論せざりしも、其實際に行なはれしは胎内の兒迄も注意せしに依りて知らるゝと説明し、獨立自尊の精神養成の必要なること等、一時間餘に亘る有益なる談話あり、次いで加治木中學校教諭なる來賓伊牟禮政治氏起ち、有望なる館生諸氏は今こゝろ見渡す處變りなけれど、近き未來に於ては各其性能に従ひ、種々なる花となりて咲くべき、終身希望の化身なり、諸氏は須らく勉強と運動とを怠るべからずと述べ、又單に些細の事件談話の中にも、吾人は大眞理を發見する者なりとの事を實証して、館生の深き考慮を促したり、館生惣代大重兼行氏の祝詞、館長の閉會辭にて式を了へ、一同茶菓の饗應ありて、午後五時半親睦會に移り各自十二分の歡を尽して、和氣洋洋裡に散會せしは九時頃なりき。

因に同館は明治十九年現第一高等學校教授谷山初七郎氏の創設に係り始めは小島小學校舎の一部を借用せし時勢の進展に従ひ漸く狭隘な告ぐるに至り同二十二年四月日を以て現位置に移轉せし者にて創

設當時より起算せば二十二年に相當すと云ふ。

◎加治木區裁判所移廳式

本誌口繪に掲げたる加治木區裁判所は昨年十月以來新築工事に着手し、總工費壹萬三千八百七拾余圓を費して本年六月十日全部落成を告げ全日柳田の池田氏跡より移轉し、去る八月二日午前十時五十分の煙火を合圖に最も莊嚴なる移廳式を舉行せり、初めに當區裁判所長川谷判事の式辭あり次で百瀬地方裁判所長、松本檢事正、本田辯護士、石神村長、鹿兒島新聞當地支局主任本田氏等の祝詞朗讀あり、檢事や務取扱平原警部の謝辭を以て式を了へ一時休憩、此間に廳舎各室の縱覽を許し、豫て宴會場に充てられたる精矛社境内饗養として日を障ぎる綠蔭に於て町重なる酒肴の饗應あり、宴半にして百瀬地方裁判所長は立ちて本廳舎を新築するに當り村長初め有志者諸君が種々の便宜を與へ殊に當村樞要の地を割き之が敷地として寄附せられたるは本官の大に感謝する處なりとの意味にて謝辭を述べ、益々獻酬盛にして歡話笑語湧くが如く又一文堂主人有馬新氏の寄附餘興たる當時橋本座へ開演中の太陽團娘子連の手踊は一層の興を添へたり、島津男爵の音頭にて加

治木區裁判所萬歳を三唱しいづれも十二分の歡興を買ひ隨時退散したるは二時頃なりし、當日の來賓は島津男爵百瀬裁判所長松本檢事正平原、内田、西の各判事熊澤檢事、本田、村上外五辯護士各警察署長郡村吏鹿兒島新聞社員其他一般有志者二百廿余名にして近來稀れに見る盛會なりし、

右新廳舎は舊郷友會加治木支部事務所の南隣にして周圍は高く石壁を築き、加ふるに一見肅然として襟を正さしむる如き嚴めしき鉄欄の門、結構雅致に富める築庭を正面に、宏壯雄偉希臘羅馬の古殿堂を見るに彷彿たる建物とは之に依て當地玄關口に燦然たる一大裝飾を加へぬ、廳舎總坪數は百九十五坪五合ありて之を細別せば本廳舎九六坪、人民扣所二八坪、湯沸所一九坪五合、倉庫二階建三〇坪、廊下十五坪、物置六坪なり、而して本廳舎は判事室、書記課、檢事局、登記所、受付、執達吏詰所、公廷、檢事公廷、被告入扣所、巡査詰所、應接所の各室ありて扣所に人民扣所と辯護士扣所の二室、湯沸所に浴室、庭丁室、湯浴所、浴室等あり、

◎太鼓踊

珍らしくも本年は反土字の人々奮起して太鼓踊を催す

このこと噂に上りければ幼少の者は固より壯老まで躍り立ち、一般色めき渡り特に市況大に景氣付くに至れり、やがて舊七月十六日曉天青原に小陣に西反土に鐘鼓の音響き渡るや、春日社或は飯屋馬場指して急ぐ者引きも切らず、隣村又は鹿兒島邊より觀覽に來るものも亦少からず、其キャンゾーキャンゾーと勇ましく飯屋馬場を打ち上げ來る頃は流石に廣き飯屋馬場と石垣の上は人を以て填め殆ど立錫の餘地なく是迄になき人出なりけり、而して例の如く庭踊を卒へ午後後は霧島社諏訪社天神社と順次に踊りしが、何處も觀者山を爲し非常の賑ひなりき、以て如何に中外に歡迎されしかを知るべし。

抑も太鼓踊は縣下何れにも古より行はれ來れるも其規律あり見榮えのあるは本村の者を第一とす而して其起原は本村にありとさへ曰へり斯かる由緒ある者を廢絶するは實に遺憾の次第、且つ之が爲め一般の活氣を引き立て村外の人迄呼び集め以て加治木の繁榮に資する少からざれば、以後は反土のみならず他の字も往時の如く奮發したきもの也、本年は市中より夫々慰勞する所ありしこのことなるが、實に美事と云ふべし市中の之が爲め蒙る利益は少からざることをなれば年々相應の

慰勞をなすは誠に然るべきことと云ふべきか、

●山林會

主として常村岸野白尾桑幡諸翁の發起になれる山林會は毎年春秋兩期に總會を開き互に造林上の研究と獎勵をなし來りしが會で報せし如く目今經營中なる村の殖林事業も主として山林會の盡力に依れる者にて去る八月十三日日本山崩和園に於て大山郡長並に石神村長上村舊村長の歡迎を兼ね臨時會を開けり會する者十五六名尙當時臨時村中の後藤山林局長は先きに西別府縣官林拂下には非常に盡力せられしに依り其の勞を謝し且つ氏の得意の造林談を聞かんが爲め之れを好機とし全時に招待せり先づ開會の時刻に至るや新納平十郎氏は會員を代表して上村前村長の在職中當時殖林の爲め盡されし功勞を謝し今後に於ても不相變盡力を乞ひ大山郡長に於ては本會の爲め他日力を添へ貰ふ場合も多からむ石神村長に於ては上村前村長全樣盡力を願ふとの希望を述べ其れに對し三氏の謝辭あり石神村長に於ては今後殖林事業に付ては力の及ぶ限り十分の盡力なさん考へなれども斯業の經驗に乏しき者なれば山林會諸君の御助力を乞ふ云々と述べ夫より宴會に移りしが何

れも殖産事業に熱心なる人々の事として殖産上の事に就て種々の有益なる話あり皆々十分の歡を盡し散會せりと因に本會は創立以來毎月一人に付金十錢宛を贈金し最早五圓餘に達せしを以て來年は苗木を買入れ村へ寄附する積なりと云ふ。

●山田造十郎教授の講演

去る八月十四日七高造士館教授山田準氏が、當地の儒者東良助氏の遺物實見の爲め來遊を幸機とし、柳文館に於て一場の講話を懇請せしに、幸に快諾を得、同日下午三時より開演されしが、薩摩魂と云ふを布演して、例を泰西の希臘に採り、同國の往昔全盛時代の面影を思ふべきは、寺院と乞食の多き事及び昔し自慢のみにて、國家の干城たる兵卒までも人に物品を乞うて恥とせざる姿なるは、畢竟根本たる希臘魂を滅却せしに基因すといふ、當薩州の如きも維新前後多士濟々として輩出せしも、今後文運の發達と物質的進歩とは漸次交弱に陥り固有の薩摩魂を忘却するの恐れなきかと警告を與へ、吾儕祖先の教育方に付き、舊時竹迫間藤四郎が程も遠からぬ旅行先より、其子大次郎(十)に與へたる留守中の家庭教訓を、詳細洩さず、磨寫實例に依

りて續演明晰、殆んど一時間に亘る適切有益なる講演を試みられ、聴衆に非常なる感動を與へたり。

●本縣事務官の更迭

本縣事務官富永鴻氏は兵庫縣事務官に轉ト千葉縣屬弓削幸太郎氏其後任となる、

●兵事會銀杯下賜

始良郡兵事會には三十七八年軍國後援の務に對し、特に其赤誠を捧げたる援群の功勞に依り、今回銀杯一組を下賜せられしが、去る八月十九日午前九時知事代理關屋事務官臨席、各村長參列の上、之れが授與式を舉行せられたり、

●松城男子小學校同窓懇話會

松城男子小學校同窓生、及有志者の懇話會は、去る八月廿三日同校講堂に於て開會せられた。先づ緒方全校訓導は開會の辭に併せて、所謂母校の現状について報告し、次に長野縣飯田高等女學校校長波多市松氏は、氏が會て公命によつて觀察した模範中學として名高い越後國糸魚川中學校の状況について、其教授訓練が一般中學校と異なり、職員生徒共に勤儉力行、熱心に其特色の發揮に努めて居り、殊に寄宿舎が万事社會生活

の實際に則つて組織されてあることと、かの有名な伊豆稻取村長田村翁について親しく聞かれた、學校教育が社會と離れてならぬ、といふ翁の卓見とを相對照して詳細に演述し、續いて福岡縣豐津中學校教諭川上親通氏は、本縣地方は比較的古蹟遺物に乏しく、たまたまあつても保存の道が講せられない爲めに、空しく世人に忘れられて仕舞ふものが甚からぬのは、實に歎すべきことである。本村には幸い他は務とすべき古蹟が今尙遺存して居るのであるから、これらはうれれ相當の手入を施し、且つは村の裝飾となし、且つは精神教育の助となしたいものであると、熱心に續説されたが、何れも聴衆に多大の感激を與へた。それから茶菓の饗應あり、各自獻話を盡し、交情を温め面白く半日を暮して退散したりと、

●同盟教育會の總會

本村同盟教育會は夏季定會を八月廿五日松城女子小學校内に開けり會するもの廿餘名先づ理事より會務の報告をなし、次に郷土史編纂に關する委員の報告ありしが右は續て近世史をも冬季定會迄に編纂を終へ然して後刊行等の件を議すべきこととなれり、其他協議の事項は三先哲(錦水院公、環山翁、冬日翁)の彰德碑建設

の件、滿廿五年間教育事務に勤続せる會員に功勞表彰の爲め金品(拾五圓以内)を寄贈する件等なりしと、同會は九月十三日島津男爵家の擧げられし錦水院公百年祭に清酒二樽を献納し別記祭文を奉讀せり、

◎女子同窓生會

松城女子高等小學校の出身者を以て組織せる同窓生會は例年の如く去る八月廿七日同校内に開催せられ出會者百四拾餘名の多きに上り互に家政の實務に付意見を交換し或は舊を談し新を討り和氣調々誠に拘すべき慰を呈せり此日來賓宮内盛直氏は「婦人と看護法」波多市松氏は「自己犠牲の精神」を演題の下に何れも一時間餘に渡りて熱心に適切に説話されしに依り會員一同に多大なる感動を興へたり午后よりは茶話會となり著音機の奏樂編引等の餘興ありて中々の盛會なりき。

◎愛國婦人會の慰問

本村に於ける愛國婦人會員は特別普通合せて百五拾九名にして今般韓國駐屯軍の將卒並に憲兵警察の暴徒討伐に従事せし部隊に慰問袋を寄贈せり其内容は最も調法に最も趣味あらしむべく工夫を凝せし由なれば之れを受けし人々は無上の感に打たれ遠征却つて家郷を思ふの情なかるべけんや。

◎平松神社例祭

今年は舊曆七月十七日及び八月十七日の兩日に於ける心岳寺例祭には、神社を西方に距る約四丁許りに、假停車場迄設置されたること連、男女老幼の參詣者非常に多く例になら肩摩袂摩の難番を極めたり。

◎青雲舎の送別會

青雲舎にては去る八月廿八日午後三時より兵學校へ入學の鈴本三雄、機關學校へ入學の大重爲廣兩舎員の送別會を催し薩摩琵琶の餘興ありて頗る盛會なりしと、

◎村吏員の新任

村書記波多勇之助氏死去により今般其後任として川畑藏助氏就任せり、

◎始良郡夏期講習會

始良郡教育會は、去る九月一日より全八日に至る八日間、理科、圖書、手工の講習會を、松城女子小學校に於て開催しぬ。理科は青山本縣師範學校教諭、文部省編纂の理科書により、理化に關する教材につきて、その理論及實驗を。圖書及手工は、佐藤鹿兒島第二中

學校教諭、該科教諭の理論及實際上の注意を。共に熱心に且つ親切に講述せられしが、會員は男女合計百六十九名。學年延長に對する準備として、緊急を要する學科目なれば、何れも眞面目に聴講研究し、豫定の課程を了へ、閉會を告げたりと。因に本村在職の教員にして、本會へ出會講習せるものは、實に四十二名の多きに達したりといふ。

◎長谷場氏送別會

本村學務委員並びに本誌編輯委員として熱心尽力中なりし長谷場氏今同帖佐村字西餅田へ創設せらるべき葉煙草試作場に奉職せらるることとなりしにより我編輯部同人は去る陰曆八月十四日晚景より日本山扇和園に於て送別を兼ね月の宴を開けり會する者十一名各自大に胸襟を開いて談し献酬進んで舞ふあり歌ふあり殆んど時の移るを知らず一同十二分の歡を盡して散會したるは十時に垂んとする頃なりき、

◎政友會九州代議士會

政友會九州代議士會は九月十日鹿兒島市商業會議所に於て開會、各縣より來會の代議士十五名並主催本縣代議士の全數と各支部の幹事等之に加り協議する所あり

其協議事項の中に左の件ありたりと、

- 一、吉松より分岐し宮崎延岡を経て大分に接続する鐵道敷設の件
- 一、八代より分岐し水俣米ノ津西海岸を経て鹿兒島に接続する鐵道敷設の件

一、鹿兒島港を開港場となすの件

閉會の後鶴崎館に於て鹿兒島支部より立食の饗應あり尙翌十一日各代議士は磯島津公館邸を觀覽し午後は市實業家各團體よりの招待會に臨めり、因に、政友會幹事長長谷場純孝氏は右代議士會に臨席の爲、五日熊本より汽車にて若廣常加治木驛通過の際は大山郡長を初め多數の有志者出迎へたりと、

◎弓削事務官の學事視察

本縣事務官弓削幸太郎氏は、角野縣視學を隨へ薩摩始良二郡の學事視察の途次、去る九月十八日蒲生を経て來加、當日一泊翌十九日、松城男女小學校及加治木中學校の状況につき詳細に視察調査するところあり、午后四時四十五分發の下り列車にて歸郷せられたり。

◎模範煙草作

葉煙草專賣法實施以來、當村に於ては煙草栽植者皆無の姿なりしも、當局者獎勵の結果、本年は試作者も余程多く見えたるが中に、徳寄市兵衛氏は、去る四月中

三畝十三歩の島地に、千四十三本の煙草を栽植し、爾來手入施肥虫害豫防等懈りなく一意専心耕作に奮勵する處ありしが、一本の虫蝕又は枯死を見るに至らず生育頗る良好にして一幹に三十五枚の若葉せるものありて、流石名煙地の國分に於ても未だ曾て見ざる處なれば、國分專賣局出張所の市原検査官等は非常に稱揚し、本年の模範受賞者は右徳寄氏に歸すべしと迄公言したる程なりと云ふ、實に名譽と云ふべし。

◎在郷軍人會

九月廿三日秋季皇靈祭の日を以て定期總會を柁城男子高等小學校講堂に開けり、先づ會長新納大佐、副會長木佐木大尉の兩氏が退役の身永く現職を汚すべからずとの理由を以て今般辭任せられたるを以て、後任として會長に陸軍少尉榎東一郎氏を、副會長に全少尉溝口近氏を推選し、柳田新助氏を理事に補欠推選せり、本會は毎回出會者會員の人数に比較して余り多からず一部有志の慨嘆するところなるを以て今後の隆盛策につき種々の研究などをなし終りて郷友會事務所に於て宴會を開きしが、美酒佳肴なしと雖今を語り昔を談し痛飲快談散會せしは正に點燈時、

◎中學校運動場の地均

中學校の東隣なる私有地三千坪を當村より買入れ中學校運動場として縣に寄附せしとは嘗て報せし處なるが縣に於ては愈々之れを受領し地均を入札に附し受負人に於ては八月上旬より地均に着手し周圍に堤防を築き工事已に竣功を告げ廣大なる運動場となれり

◎稀有の大豊作

本年の稻作は植付當時曇天勝ちにて農家は心に痛せしも七月中旬頃より晴天打續き温度非常に高く別に蟲害もなく發育佳良にして二十日二十日の難關も無事に通過し平年作より一割八分昨年比し八分の增收は僅かならんとて農民一般に樂み居れり

◎霧島山麓の特別會員

元當村の人にして、目下牧園村鹿兒島種馬所にありて全所の御用商をつとめ、多額の資産を作し、斯界にありて頗る羽振りを利かせ居る松田新助氏は、今夏暑を全山中に避けたる本誌の編輯員前田豐彦氏より、同郷會の設立と本誌發刊の事をきき、懷郷の情禁する能はず、直ちに特別會員に加入し、愛郷の誠を表せられたり。

◎濱島彦助氏の厚意

濱島氏は肥薩鐵道加治木驛長なるが、本會の趣旨に賛成し、基本金として金五圓を寄附せらる、吾人は茲に特記して其厚意を謝す。

◎流行病

夏期に至れば所々に傳染病發生し生命財産を奪ふこと少からず寒心すべきことなるが本年は其流行甚しきに至らず國家の爲め慶すべき事なり、本村にては夏期初めに三人の赤痢病患者を生じ内壹名は死亡し他は恢復せり其後幸に發生せざりしに秋冷の九月に至り一人の患者を生ぜしは遺憾の次第なり、今其發生の爲め村より支出せし金額を聞くに前者に貳百餘圓を要し後者に百餘圓を要せしと、僅か數人の患者に對しかく莫大の費用を要すとは流行病の村財政に及ぼす損害の如何に大なるかを知るに足らん各自注意すべきことなり、

◎美事一束

◎伊藤世傑氏は亡妻モト子の五十日祭典費を除き貯蓄五圓債券四枚を柁城小學校基本金に寄附
◎佐藤熊太郎氏は亡父の十五年祭費を省き金拾圓を柁城小學校基本金に附寄

◎新納イキ子(反土)は地球儀一個を小島小學校へ寄附
◎東タカ子(木田)は亡父の五十日祭費を節し野史一部を小島小學校備品中へ寄附

因に吾人は別項記載の小杉氏の義舉と共に毎號此種の美事を掲載するの光榮を有するを喜ぶもの也。

◎各學校入學者

京都帝國大學大學院	法學士	曾木新三
東京帝國大學大學院	法學士	原田維繼
東京帝國大學文科學部	理學士	本田親二
海軍兵學校		鈴木三雄
千葉醫學專門學校		岩崎
熊本高等工業學校		原田英二

讀者の聲

▲錦水院公百年祭典に參列せし際余は如何にも其幽靜閑寂の境を去るに忍びなかつた一人であるが同日參拜の人々は皆余と同感であつた事と信ず若し夫れ運を穿ち段を設けて公開の遊園地とせば自然の公園天然の仙境となるを疑はす而して此を錦水園と命名せば更に一段の光彩を添ゆる事と信ず(參拜者の一人)
▲承れば講談界の泰斗美富一調來慶の筈に候由なるが

會報

◎會員動靜

- 男爵夫人島津直子は此度鹿兒島婦人會々長に推薦せらる。
- 本誌編輯員長谷場唯二氏は今般木村學務委員を辭して專賣局帖佐業煙草試作場へ轉勤せらる。
- 陸軍歩兵中尉新納豊二氏は頃日曾木家に復籍せられたり。
- 專賣局熊本收納所技師内野源次郎氏は先般石川縣に轉勤。
- 陸軍輔重兵大尉篠原長千代氏は先月鹿兒島市春日町植村氏令嬢と華燭の典を挙げらる。
- 在台灣岡山秀治氏は田布施の某嬢と結婚の約整へり。
- 病氣治療の爲め上京中の本誌編輯員原田定吉氏は八

月末病氣輕快歸郷。
●在台灣岩崎剛氏は大連へ轉勤。
●會員伊東祐晴、波多勇之助、柏原九十郎、渡邊彦熊、林平太令閨美津子の諸氏は先頃死去せらる、哀悼に不堪。

●大阪大同生命保險會社總務課長城川善藏氏は此程全會社東京支店長を命ぜらる。

●久しく花城小學校教師たりし竹下喜三太氏は本月初旬渡台せらる。

●東京時事新報記者濱田精藏氏は遠からず渡英せらる、由にて其準備の爲此程歸省。

●會員諸君の轉宿左の如し

東京府在原郡大森字山王二五九〇

木佐木幸輔

東京府豊多摩郡大久保村字東大久保六二

宅間 徳二

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五四九

上村 武治

茨城縣久慈郡太田町太田小林區署

國師 政次

福岡縣豐津中學校(前號に師範學校)

川上 親通

熊本市南千反畑町二七

壹岐 桃治

對馬竹敷要港第十三艇隊附三十八號

楠木 彦藏

台灣淡水稅關C號拾番官舍

竹下 善七

Hotel Del Coronado Coronado Beach Cal. U.S.A.

東京府南葛飾郡小松川村字新町四六四〇
東京市小石川區小日向台町一ノ四四
韓國元山警察署

◎本會の基本金寄附者氏名錄

(第六回申込順)

金五圓 松田 新助君 金五圓 本田 親二君
金五圓 老山戸之助君 金五圓 神村竹五郎君
金五圓 濱島 彦助君 金五圓 新納 範二君
金五圓 原田 維繼君

小計金參拾五圓

通計金九百〇六圓六拾四錢也

◎雜誌代領收

一金壹圓貳拾錢 宅間徳二君
一金壹圓貳拾錢 桑迫茂樹、濱田與一郎の二君
一金九拾錢 中摩豊武君
一金七拾錢 青 雲 舍
一金六拾錢宛、郁文館、柚木彦藏、上村武治、松下利彦、岩田喜助、法元勘次郎、老山武彦、上村直彌、瀬戸口正彦、重久定志、久保丑之助、桑原靜哉、原田武

雄、宇都宮勝平、池田彪一、福永秀彦の拾六君
一金五拾五錢宛、佐藤淺太郎、佐藤新太郎、横山恵助、立山岩太郎、金澤清次、森山彦太郎、白尾國威の七君
一金五拾錢宛、新名彦二、松下貞助、野田親昌、壹岐東一郎、山上逸、美坂助右衛門、西田武彦、美坂助七、平山彌太郎の九君

一金四拾錢、宮路直太郎君
一金參拾錢宛 江口仲賦、松山祐吉、大迫金藏、大迫仲兵衛、川上四郎太、上床喜之丞、前田延之丞、中村與一郎、竹下鉄之丞、江口彦五郎、日高良太郎、松永強一、二見金藏、土橋兼治、城敬治郎、岩穴口新助、豊留龜助、園田平治、伊集院秀彦の十九君

一金貳拾五錢 岩崎俠君
一金貳拾錢宛 石原新賦、厚地正種の二君

小計金貳拾九圓五拾錢

合計金百八拾九圓四拾七錢也

◎收入支出精算報告

收入
一金百八拾九圓四拾七錢 會費收入
一金壹圓七拾六錢 廣告料

計金百九拾壹圓貳拾參錢

支出

- 一金壹圓四拾錢
 - 一金百拾七圓貳拾八錢
 - 一金拾五圓六拾壹錢
 - 一金五圓貳拾參錢五厘
 - 一金四圓九拾九錢
 - 一金參圓六拾壹錢
 - 一金壹圓九拾錢
 - 一金貳圓〇七錢五厘
 - 計金百五拾貳圓拾錢
 - 差引殘高金參拾九圓拾參錢也
- (現在金)
- 寫真費
 - 雜誌印刷料
 - 郵便費
 - 筆紙墨費
 - 器具器械費
 - 薪炭費
 - 雜費
 - 配達費
 - 寄附申込高
 - 現金領收高
 - 利子收入

特別會計報告

一金九百〇六圓六拾四錢
 內金六百九拾八圓拾九錢
 他ニ金貳拾壹圓拾壹錢
 右金額は本會基本金として毫末も使用することなく
 全部確實なる方法を以て扶殖を計りつゝあり。

◎在外本誌購讀者住所氏名(其四)

鹿兒島市金生町日清生命保險會社代理 長崎 公知

東京府豐多摩郡澁谷村字下澁谷廣尾 中平田孝太郎
 三〇落合方 桑迫 茂樹
 伊佐郡菱刈村尋常高等小學校內 江口 仲耿
 韓國忠清北道陰城守備步兵第廿三聯隊 大迫 藤五郎
 第三中隊 松田 新助
 伊佐郡大口町 上村 直彌
 始良郡牧園村下中津川

韓國京城東洋協會專門學校內
 ◎同鄉會規則摘要

- 第一條 本會は加治木同鄉會と稱し加治木人及加治木に縁故ある者を以て之を組織す、
- 第三條 本會の主旨を貫徹する爲定期に總會を開き又は雜誌を發刊して會員に配付するものとす但雜誌の配付は當分の間會費として毎月金五錢を徴出する者及第十六條に該當する會員に限る、
- 第十四條 本會は雜誌「花城」を四季に一回づゝ之を發行す、
- 第十六條 本會に金五圓以上寄附したる者は特別會員とす、

廣告

拜啓各位愈々御健勝奉賀候陳者先般愚息
 共墓前へ石燈御建立被成下難有御親情の
 程奉拜謝候彼等も亦地下にありて定め
 諸君の友誼に感泣致居事と存候乍畧儀誌
 上を以て御禮申上候敬具
 明治四十一年十月一日

中摩順藏 田平助

會告

- 一、次號發刊は來春元旦、原稿切は十二月一日、
- 一、會員の轉宿は其都度必らず通知ありたし、然らざれば發送上困難なり、爾後御注意を乞ふ、
- 一、新年號には在郷本誌購讀者の名簿を悉皆掲載する筈、仍て此際多數中込ありたし、
- 一、本誌第一號への購讀者にして豫て會費一ヶ年分納付又は數ヶ月分納付中の會員は既に前金切れとなりければ此際至急御送金を希ふ、

明治四十一年十月十日印刷
 明治四十一年十月十五日發行 (非賣品)

編輯兼 發行者 本田 克
 鹿兒島縣松島郡加治村反土九十四番戸

發行所 加治木同鄉會事務所

印刷人 北川 右之丞

印刷所 鹿兒島新聞社